

アダム・スミス・コレクションの性質と書誌に関する一考察

著者	高橋 秀悦
雑誌名	東北学院大学経済学論集
号	191
ページ	173-219
発行年	2019-03-26
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024086/

アダム・スミス・コレクションの性質と書誌に関する一考察

高橋 秀悦*

はじめに

東北学院大学図書館蔵のアダム・スミス・コレクションは、*The Theory of Moral Sentiments* (1759年の初版から1880年のnew editionまでの10シリーズ及び1817年のアメリカ版・1830年のフランス語版第2版)、*An Inquiry Into the Nature and Causes of the Wealth of Nations* (1776年の初版から1863年のnew edition revisedまでの32シリーズ、1790年から1859年までのフランス語版7シリーズ及び1861年・1933年のドイツ語版)、*Essays on Philosophical Subjects* (1795年ダブリン初版)、及び*The Works of Adam Smith* (1811-1812年版) から構成されている¹⁾。加えて、本学には遠藤和朗先生を中心に収集してきたアダム・スミス関連の稀少図書等も多数あることから(遠藤(1985)、(2001)を参照のこと)、本稿では、これらも含めた「広義」のアダム・スミス・コレクションを論考の対象とする。

アダム・スミスの著作は、周知の*The Theory of Moral Sentiments*と*An Inquiry Into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*に尽きる(以下、それぞれ、『道徳感情論』、『国富論』と呼ぶ)。スミスは、1790年に逝去するが、死の直前にあらゆる草稿を焼却させたと伝えられているが、*Essays on Philosophical Subjects* (『哲学論文集』)は焼却から免れ、1795年に出版された遺著である。このほかスミスの著作として残されているものは、*The Life of David Hume, Esq.* (『ヒュームの生涯』)に採録されたスミスの手紙や、国富論草稿、雑誌に掲載された数編の論文、数冊の講義ノート(グラスゴー大学での講義とエジンバラでの公開講義に関する学生等による筆記録)、ハミルトン詩集への短い序文、アメリカ問題に関する覚書、数通の手紙等に過ぎない。

こうしたスミスの著作の希少性に着目すると、その中心となる『道徳感情論』と『国富論』の書誌探求は、スミスの思想の本質や考え方の神髄に迫るものではないことは明らかであるが、彼の著作の外延的發展過程や普及過程を知る上できわめて重要である。とりわけ、『国富論』は、1776年にロンドンで発行されてまもなく、ダブリンでも発行され、ドイツ語翻訳版も発行されている。その後も、各地で次々に非正規版が発行される状況になっていたからである。

*アダム・スミス研究の第一線で活躍された遠藤和朗先生のご退職にあたり、ご厚誼を賜りましたことに対して、アダム・スミス・コレクションに関するこの書誌的考察を捧げます。また、本稿を作成するにあたり、馬場幸栄氏(一橋大学社会科学古典資料センター助教)、大胡真人氏(OAGドイツ東洋文化研究会シーボルト・ゼミナール・コーディネーター)、石井美樹氏・太田潤氏(明星大学図書館)、及び小野寺洋子氏(東北学院大学図書館情報課)・坂本藍氏(東北学院大学図書館)には、資料閲覧等に関し、多大なる助力を賜りました。また、栗林野一氏(東北学院大学研究機関事務課)には、写真撮影等の協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

1) この「狭義」の東北学院大学図書館蔵のアダム・スミス・コレクションは、遠藤和朗先生を研究代表者とし、平成12(2000)年の文部省私立大学研究設備整備費助成を受け、3,570万円(各版55点、計138冊)で購入したものである。

本稿の主たる目的は、東北学院大学図書館のアダム・スミス・コレクションに収められた貴重書を、書誌的に、時系列的に考察することによって、その性質と特徴を明らかにすることにある。また、本稿の従たる目的は、1) J. タッシーによるアダム・スミスの肖像メダリオンと出版物との関係、2) 『国富論』初版の校合違いの問題、3) 著作権をめぐる諸問題について考察することにある。

これらの目的を達成するために、第1節～第13節では、『国富論』についての書誌的考察を行っている。『国富論』の文献学的意義（第1節）、『国富論』の日本国内での所蔵状況（第2節）、本学所蔵の『国富論』初版の特徴（第3節）、他大学所蔵のバリエーションと変造本（第4節）、本学所蔵1776年ダブリン版との比較（第5節）、出版事業としての『国富論』（第6節）、A. リンカーンの署名入り本学所蔵フィラデルフィア版（同じく第6節）、出版事業としての『国富論』（第7節）、著作権と出版競争（第8節）、ゴールドスミス・クレス文庫所蔵書と本学所蔵書との関係（第9節）、『国富論』1863年版と『経済説略』（第10節）、我が国最初の『国富論』翻訳、人間関係あれこれ（第11節）、『国富論』海外翻訳版（第12節・第13節）等のトピックスを通して、本学のアダム・スミス・コレクションの性質と特徴を明らかにする。

第14節は、『道徳感情論』についての書誌的考察を行うとともに、日本国内での所蔵状況にも言及している。第15節は、『哲学論文集』、『アダム・スミス著作集』等についての書誌的考察を行っている。

これらの考察の結果、『国富論』初版第1巻の日本国内での所蔵数は、36大学49冊であることや『道徳感情論』初版の所蔵数は、19大学・24冊であることが判明した。また、1779年の『国富論』スウェーデン語版は、ゴールドスミス・クレス文庫にも収められておらず、日本国内では本学図書館のみが所蔵していることも判明した。

これらの知見にとどまらず、本稿の第8節、第12節及び第15節では、本学図書館所蔵の「J. タッシーによるアダム・スミスの肖像メダリオン（1787年制作）」の書誌的な意味を探求している（ちなみに、2007年3月から、イギリス20ポンド紙幣には、タッシーのメダリオンをもとにしたスミスの肖像が印刷されている）。

さらに、本稿では、複数の『国富論』初版を比較すると、これらに校合・製本の違いが見られることから、第3節ではこれについて考察している。さらに、第8節等において、アン女王法による著作権保護と著作権切れ後の出版者の事業者的対応についての試論も展開している。

1. 『国富論』初版～第6版等の文献学的意義

『国富論』の初版は、スミスのスコットランド人の友人ウィリアム・ストラーンによってロンドンで印刷された。平易な文章で書かれ、また、当時としては衝撃的な著作の内容ということもあって、印刷された500部（一説に1,000部）は完売された²⁾。好調な売れ行きから、ロンドン以外でも印刷・出版されるようになり、アイルランドのダブリンでも非正規版も出版されるに至った。

2) 500部発行は、Todd (1976), p.15による。1,000部発行は、三邊 (1940)、水田 (1968) のp.160及び速藤 (1985) による。

『国富論』は、スミスの存命中に、1776年の初版から1789年の第5版までが刊行され、第6版は、スミス自身が校正を行ったものの、逝去翌年の1791年に刊行されたものである。しかしながら、『国富論』の売れ行きの好調さから、スミスの存命中でも、各地で非正規版の『国富論』が刊行されていたのである。

第7版以降は、スミスが決して目を通すことがなかった刊行物であるが、1805年の第11版までは、ロンドンの同じ版元から出版された。第11版には、プレイフェアによって、注、補章、スミスの伝記がつけられた。これ以降は、当時の高名な経済学者による注や伝記や解説等がつけられ、ロンドン以外の各地でも出版されるようになる。

こうして、各地でバージョンの異なる『国富論』が刊行されるに至ると、スミス研究者にとっては、どれが正しい『国富論』なのか、どれを定本とすべきかが問題となる。

1904年9月、E. Cannanは、(正規版の)初版から第5版までのバリエーションを比較考察し、スミス生前の最後のバージョンとなった「第5版」を底本として、キャンナン版『国富論』を刊行した。

また、『国富論』の初版刊行200年後の1976年、R.H. CampbellとA.S. Skinnerは、W.B. Toddの助力を得て、(正規版の)初版から第6版までの『国富論』と第2版増補版を対象として種々のバリエーションを比較考察した。そして、この考察に基づき大幅な改定が行われた「第3版」を底本とする1976年のグラスゴー版『国富論』を刊行した。

グラスゴー版の比較対象は、大英図書館、オックスフォード大学ボドリアン図書館³⁾、グラスゴー大学、オーストラリア国立図書館、ニューヨーク公共図書館、プリンストン大学、テキサス大学オースティン校の7つの機関の49冊である(第1表)。この7つの機関が、第1表に記載された冊数以上の『国富論』を所蔵している可能性は残るが、『国富論』の文献的研究のためには、こ

第1表 グラスゴー版(1976年)の考察対象の『国富論』の冊数

図書館・大学名	初版	第2版	第3版	第4版	第5版	第6版	第2版増補版	合計
大英図書館	1	1	1	1	1		1	6
オックスフォード大学ボドリアン図書館	1		1	1		1		4
グラスゴー大学	3	1		3	2		1	10
オーストラリア国立図書館	1	1	2	1		2	1	8
ニューヨーク公共図書館	5	1	1	1		1	1	10
プリンストン大学	3						1	4
テキサス大学オースティン校	2	1	1	1	1	1		7
合計	16	5	6	8	4	5	5	49

(出所) グラスゴー版『国富論』, p.61 の注1

3) オックスフォード大学の図書検索システムSOLO (SEARCH OXFORD LIBRARIES ONLINE) で検索すると、オックスフォード大学の各図書館を統括する「ボドリアン図書館」蔵の『国富論』初版は、1980年にオールソール・カレッジ図書館に返却されたこと、また、ニュー・カレッジ図書館でも初版を1セット所蔵していることが分かる(2018年12月現在)。従って、オックスフォード大学としては『国富論』初版を2セット所蔵していることになる。

の数量で十分であることをグラスゴー版は示唆しているのである。

2. 日本の大学図書館の『国富論』の所蔵状況

2.1 『国富論』初版～第6版等の所蔵状況

グラスゴー版の比較対象となった機関と比較して、日本の大学図書館の『国富論』の所蔵状況は、どのようになっているのか？

第2表は、2018年末の『国富論』の初版～第6版、1776年ダブリン版および1776年ドイツ語版について日本国内の所蔵状況を整理したものである。第2表には、一橋大学と慶應義塾大学を双極として、東京大学、千葉大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、神戸大学、九州大学の8国立大学、中央大学、専修大学、東京経済大学、成城大学、明星大学、福山大学、大阪商業大学及び東北学院大学の9私立大学の17大学がリストアップされている。

この第2表の上部は、国立情報学研究所（NII）のCiNii検索・各大学図書館等のOPAC等の検索から整理したものである。まず、『国富論』各版について国立情報学研究所のCiNii検索を行い、次に、抽出された大学図書館ごとに（CiNii検索とリンクしている）各大学図書館等のOPAC等を利用して、大学別の『国富論』初版～第6版の「第1巻」の所蔵冊数を確認した。この確認作業から、初版～第6版をおおむね所蔵する大学は、10大学であることが明らかになった（第2表の「国立情報学研究所CiNii検索」欄には、この10大学名を明示した）。初版～第6版のうち1冊、あるいは数冊を所蔵する大学については、第2表の上部に「その他の大学」として一括して所蔵数を表示した。北海道大学、東北大学、小樽商科大学、埼玉大学、明治大学、立教大学、同志社大学、関西大学等は、これに該当する（詳細は、第2.2節を参照のこと）。

上のCiNii検索によって抽出できなかった大学については、『国富論』を所蔵しているものと想定される大学に見当をつけて各大学のOPAC等により確認した（したがって、第2表以外にも『国富論』を所蔵する大学がある可能性も否定はできない）。

個別の大学のOPAC等による確認作業の結果、各バージョンをおおむね所蔵している大学は、慶應義塾大学から東北学院大学までの7大学であった（第2表の下部を参照のこと）。この7大学以外の大学については、「その他の大学」として整理・区分した。ここには、大阪市立大学術総合センターと早稲田大学が入る（早稲田大学は、『国富論』第3版を1冊所蔵している）。

『国富論』の書誌学的研究のためには、単一の図書館が第1表のような冊数を所蔵していれば、ほぼ十分である。第2表からは、一橋大学と慶應義塾大学の所蔵数が、世界的に見ても冠たるものであることが分かる。また、この2大学以外の、第2表にリストアップされた日本の15大学も、第1表の機関の所蔵数と遜色がなく、書誌学的研究に十分な数量を所蔵していることが状況に分かる。

2.2 日本の『国富論』初版の所蔵状況

『国富論』は、経済学の古典の中では、第一級の内容が書かれている。とりわけ、初版は、印刷・

製本等においても第一級の書籍である。また、初版の装幀が醸し出す風格から、スミス研究者ばかりではなく、コレクターの間でも羨望的になり、稀覯本をしての人気も高い。こうしたことから、日本には、初版500部（一説に1,000部）のうちほぼ1割があるとも言われていたのである。

これを確認するために、「CiNii検索」をかけると、追手門学院大学、大阪大学、大阪府立中央図書館、小樽商科大学、鹿児島大学、関西大学、京都外国語大学、京都大学、神戸大学、埼玉大学、札幌学院大学、成城大学、東京大学、東北大学、同志社大学、長崎大学、名古屋大学、一橋大学、放送大学、宮崎大学、明治大学、横浜国立大学、立教大学、さらに秋田大学、久留米大学、福山大学、和歌山大学、九州大学の28大学等が抽出され、また、「CiNii検索外」のOPAC等の検索では、慶應義塾大学、中央大学、専修大学、東京経済大学、明星大学、大阪市立大学術総合センター（福田文庫）、大阪商業大学、東北学院大学の8大学が初版所蔵館として抽出される。各大学別に所蔵冊数も確認すると、この36大学等で49冊に上る。ただし、大阪市立大学術総合センター（福田文庫）所蔵の2セットのうち、1セットには疑義がある。これについては、後述する。

第2表 『国富論』 国内17大学の所蔵状況

	大学名	初版 1776年	第2版 1778年	第3版 1784年	第4版 1786年	第5版 1789年	第6版 1791年	ダブリン版 1776年	ドイツ語版 1776年	合計
国立情報学 研究所 CiNii 検索	東京大学	1	1	2	1	1	1	1	1	9
	一橋大学	6	2	2	2	1	1	1	2	17
	千葉大学		1	1	1	1	1	1		6
	名古屋大学	2		1	1	1	1		1	7
	京都大学	1	1	1	1	1	1	2		8
	大阪大学	1	1	1	1	1	1	1	1	8
	神戸大学	1	1	1	1	1			2	7
	九州大学	1		1	1	1		1		5
	成城大学	2	1	1	1	2	2			9
	福山大学	1	1	1	1	1	1	1		7
その他の大学	19	2	2	6	2	3	3	1	38	
国立情報学 研究所 CiNii 検索 外	慶應義塾大学	3	3	2	1	2	2	3	2	18
	中央大学	1	1	1	1	1	1			6
	専修大学	1	1	1			1	1		5
	東京経済大学	2	1	1	1	1	1	1		8
	明星大学	2	1	1	1	1	1	1		8
	大阪商業大学	1	1	1	1	1	1			6
	東北学院大学	2	1	1	1		1	1	2	9
	その他の大学	2	1	1						4
	合計	49	21	23	23	19	20	18	12	185

(注1) 表の数字は、『国富論』の各版第1巻の所蔵数である。

(注2) 表の『国富論』初版のうち1冊について、疑義がある（第4節を参照のこと）

このように、まさに風説の通りに、日本には初版500部の1割があったのである。経済学分野ではもっとも古い書のひとつであること、経済学を学問的に体系化し、現実の政策への応用を志向した初めての書であること、「近代経済学の父」と呼ばれるようになったアダム・スミスへの畏敬の念、そして外国と比して日本のスミス研究が盛んで研究水準も高いこと等が、各大学の経済学部をして初版収集に駆り立てたものと見られる。このように、今や、日本の大学図書館にとって、『国富論』初版は、もはやレアものではなく、あって当たり前のものになっている。

3. 東北学院大学図書館所蔵の『国富論』初版

3.1 初版：5冊の1776年版

上で述べたように『国富論』初版は、36大学等で49冊が所蔵されているが、複数冊を所蔵する大学は、一橋大学（6セット）、慶應義塾大学（3セット）、名古屋大学（2セット）、大阪市立大学（2セット）、成城大学（2セット）、東京経済大学（2セット）、明星大学（2セット）及び東北学院大学（2セット）の8大学にとどまっている。

『国富論』初版が刊行された1776年には、ダブリンで非正規版が発行され、ライブツィヒではドイツ語翻訳版も発行されている。文献学的には、いずれも重要なものである。第2表を見ると、ダブリン版とドイツ語版の両方を所蔵する大学は、一橋大学（それぞれ1セットと2セット）、東京大学（各1セット）、大阪大学（各1セット）、慶應義塾大学（それぞれ3セットと2セット）及び東北学院大学（それぞれ1セットと2セット）の5大学にとどまっている。

このように、東北学院大学は、『国富論』初版2セット、ダブリン版1セット、ドイツ語版2セットを所蔵しており、1776年に刊行された『国富論』の所蔵数は、一橋大学や慶應義塾大学に次ぐ。

3.2 2種類の『国富論』初版

3.2.A 原裝アンカット版と仔牛皮背表紙版

東北学院大学図書館所蔵の『国富論』初版（ロンドン発行）は、

「ブルー・グレーの厚紙表紙の原裝アンカット版（横23.5cm×縦30cm）」

「仔牛皮背表紙の製本版（横22cm×縦27.5cm）」

の2種類である。

出版者は、ともに、

PRINTED FOR W.STRAHAN; AND T.CADELL, IN THE STRAND

すなわち、W.ストラーンとT.カデルである。

1976年グラスゴー版の書誌情報によれば、『国富論』初版は、1776年3月9日にロンドンにおいて、価格1ポンド16シリングで発行された（p.61）。大きさは「4°」、すなわち、「四つ折り版（横24cm×縦30.5cm程度）」で、「ブルー・グレーの厚紙表紙」または「マーブルの厚紙表紙」であった。本学の「原裝アンカット版」の「大きさ」や表紙の「色や作り」とも、ほぼ一致している。「原裝アンカット版」は、基本的には4葉（8ページ分）が1セットとして印刷され、（下部は開いてい

るものの) 2葉の上部は袋状になったままで複製本されたものである。通常、「原裝アンカット版」の購入者は、上部や下部を2～3cm幅で裁断し、「仔牛皮背表紙」をつけ、金箔の背文字を入れて製本する。本学所蔵の2冊目の『国富論』は、まさにこのタイプである。

3.2.B 書誌情報

これまで『国富論』初版に関する書誌情報をあまり紹介してこなかったので、ここで詳しく言及する。

周知のように『国富論』初版は、2分冊で発行された。この初版第1巻の目次には、第2巻までのすべての目次が掲載されていたが、第1巻には、第3編第4章までが所収されていた。

『国富論』初版第1巻は、表題 (iページ)、道徳感情論第4版のお知らせ (iiページ)、目次 (iii-xiページ)、空白ページ (xiiページ) から始まり、本文に入る。「本文」は、1ページから510ページまでであり、最後の2ページが空白ページとなっている。

「本文」の偶数ページの「ヘッダー」には、「THE NATURE AND CAUSES OF」と印刷され、「左側の上」には「ページ番号」と「編番号 (例えば、第1編ならば、BOOK.I)」が印刷されている。また、奇数ページの「ヘッダー」には、「THE WEALTH OF NATIONS」と印刷され、「右側の上」には「ページ番号」と「章番号 (例えば、第10章ならば、CHP.X)」が印刷されている。

「本文」の「最下行 (フッター)」には、例えば、1ページ (1葉目) には「VOLI. B with」、2ページには「distributed」、3ページ (2葉目) には「B2 out」のように印刷されている。「with」、「distributed」や「out」は、次のページが、「with」、「distributed」や「out」から始まることを意味している。

3.2.C 校合

これらを要約的に表示すると、第1巻の校合 (丁数・ページ付け) は、

$$A^4 a^2 B-L^4 M^4 (\pm M3) N-P^4 Q^4 (\pm Q1) R-T^4 U^4 (\pm U3) X-2Y^4 \\ 2Z^4 (\pm 2Z3) 3A^4 (\pm 3A4) 3B-3N^4 3O^4 (\pm 3O4) 3P-3T^4$$

i タイトル, ii 道徳感情論第4版のお知らせ, iii-xi 目次, xii 空白ページ,

1-510 本文, 511-512 空白ページ

となる (グラスゴー版のp.61及びTodd (1976) のp.3)。

この「折記号」は非常に暗号めいている。ファクシミリ版「解説」に簡単な説明もあるが (pp.38-39)、印刷製本の関係者以外には分かりにくいので、ここで簡単に説明しておこう。

1ページの「VOLI. B with」の「B」は、第1巻の「B」セクションを示している。「B」セクションは、8ページまでの「4葉」である (これを「折記号」で示すと「B⁴」なる)。次の9ページの「最下行」には、「VOLI. C of」と印刷されており、「C」セクション (9～16ページまで) の4葉を示している。以下同様にして、「Z」まで続く (ただし、「J」、「V」、「W」は欠番である)。「Z」の次の記号は、「Aa」である。「Aa」から「Zz」まで続く (ただし、「Jj」、「Vv」、「Ww」は欠

番である)。上の「折記号」の「2Y⁴」や「2Z⁴」は、「Yy」や「Zz」を意味し、いずれも「4葉」であることを表している。「Zz」の次の記号は、「3A」である。『国富論』初版では「3T」まで続く（ただし、「3J」は欠番である）。

これを前提にして、分かりやすく表現すれば、「本文」は

B-Z ⁴ (J, V, Wは欠番)	88葉 (176ページ)
Aa-Zz ⁴ (Jj, Vv, Wwは欠番)	92葉 (184ページ)
3A-3T ⁴ (3Jは欠番)	76葉 (152ページ)
計	256葉 (512ページ)

となる。ただし、3Tの4葉目は、511-512ページに該当し、「空白ページ」となっている。

「折記号」の「A⁴ a²」は、冒頭の「i タイトル, ii 道德感情論第4版のお知らせ, iii-xi 目次, xii 空白ページ」に関するもので、「A」セクション4葉に加えて、「a」セクション2葉の12ページで構成されていることを意味している。したがって、ページ数は、合わせて262葉 (524ページ) である。

上の「折記号」の中の「(±M3), (±Q1), (±U3), (±2Z3), (±3A4), (±3O4)」は、印刷の過程において、この6葉が差し替えられたことを意味している。例えば、「(±M3)」は、「M」セクションの3葉目が取り除かれ (-), 新しい3葉目が加えられた (+) ことを意味している。

第2巻の校合の詳細な説明は割愛し、ここでは、最終ページと差し替え箇所について紹介する。本文は587ページまでで、次の588ページは「お知らせ」である。このページのヘッダーには、「BOOKS printed for and sold by T.CADELL, in the *Strand*.」と印刷されている。「QUARTO」の見出しが付けられ、「The HISTORY of ENGLAND」をはじめ、カデルによって出版・販売された「4つ折り版」11冊の書誌情報が掲載されている。

差し替え箇所には、グラスゴー版では、3Z⁴(±3Z4) と4C⁴(±4C2・3) の2箇所であるが、Todd (1976) では、これにD⁴(±D1) と4B⁴(-4B1・2+4B1・2) が追加されている。第1巻にしろ、第2巻にしろ、差し替え前の印刷物の内容が気にかかるところでもある。

3.2.D 製本の優劣

本学の「原裝アンカット版」第1巻では、「A」「a」～「H」セクションまでの34葉 (68ページ) の上部の袋部分がすでに切り開かれている。「I」～「3T」セクションの222葉 (444ページ) の上部は、上で述べた「±M3, ±Q1, ±U3, ±2Z3, ±3A4, ±3O4」の6葉を除き、カットされずに袋綴じのまま残されている。「M3, Q1, U3, 2Z3, 3A4, 3O4」の6葉は、いずれも、袋部分が切り開かれ、「該当する葉」も切り取られ、幅5mm～15mm程度の紙片が残されている (符号「-」)。しかも、この紙片の上から「新しい葉」が貼付されている (符号「+」)。

本学の「仔牛皮背表紙版」は、製本された版であるので、当然に上部の袋部分はすべて開かれている。第1巻の「M3」～「3A4」までは、「原裝アンカット版」と同様に、幅5mm～15mm程度の紙片の上に、「新しい葉」が貼付されている。しかしながら、471-472ページの「3O4」には、

切り取り痕や貼付がまったく見られず、きれいに製本されている。本来であれば、471ページのフッターは、印刷記号の「304」が印字される箇所ではないが、「仔牛皮背表紙版」には「304」の印字がある。これは、471-472ページの紙版が差し替えられ、印刷製本されたことを意味している。Todd (1976) の表記を使えば、この箇所は「±304」ではなく、「-304+304」である。

本学の「原装アンカット版」第2巻では、Todd (1976) が指摘したD1, 3Z4, 4B1・2, 4C2・3の上部の袋部分がすでに切り開かれていた。D1と3Z4の葉は切り取られ、残されて紙片に新しい葉が貼付されている。4B1・2の葉も切り取られ、切り取り痕も残されているが、貼付は見られず、新しい葉（「原装アンカット版」のpp.553-556）が挿入され、製本されている。4C2・3の葉（同書、pp.563-566）には、切り取り痕はまったく見られない。上部の袋部分が切り開かれていることからすれば、古い葉が新しい葉と交換され、麻糸で綴じ込まれたものと見られる（p.564とp.565は麻糸の結び目がハッキリ見える箇所にあたっている）。まさに、Todd (1976) が、「±4C2・3」ではなく、「-4C2・3+4C2・3」と表記したことも一致している。

「仔牛皮背表紙版」第2巻では、3Z4の葉は切り取り・貼付が確認できる。4B1・2の葉は、「原装アンカット版」と同様に、2葉の切り取り痕はあるが、貼付がなく、新しい葉が挿入されている。D1と4C2・3の葉には、第1巻の304と同様に、切り取り痕や貼付が見られない。すなわち、「-D1+D1」と「-4C2・3+4C2・3」である。

このように、4C2・3の葉に関しては、本学の「原装アンカット版」、「仔牛皮背表紙版」ともに、Todd (1976) の表記と一致している。しかしながら、D1の葉に関しては、「原装アンカット版」の「±D1」は、Todd (1976) と一致するが、「仔牛皮背表紙版」は、「-D1+D1」である。

上で述べたように、「原装アンカット版」の校合は、第1巻、第2巻とも、Todd (1976) の表記とすべて一致している。他方、「仔牛皮背表紙版」は、第1巻、第2巻ともに、それぞれ1葉において、切り取り痕が見られないものの、差し替えられ製本されているのである。

第3表は、一橋大学社会科学古典資料センター所蔵の『国富論』初版5セット（村瀬文庫を除く）と明星大学図書館所蔵の『国富論』初版2セットについても、上と同様の調査を行い、整理したものである。その結果

1) Todd (1976) の指摘とすべて一致するものは、未製本の本学所蔵の「原装アンカット版」のみであること、

2) 本学の「仔牛皮背表紙版」を含め7セットは、それぞれ複数箇所が差し替えられ製本されていること（切り取り痕は見られない）、

3) 一橋大学社会科学古典資料センター所蔵1セット（T.U.C. 2）には、まったく切り取り痕は見られず、きれいに製本がなされていることが判明した⁴⁾。

『国富論』初版のアンカット版を購入した人は、それぞれが業者に製本・装丁を委託していた

4) メンガー文庫、フランクリン文庫ともに、第2巻の「4B2」から「4C1」まで、すなわち、pp.555-562の8ページ分が欠落している。

第3表 「国富論」初版の校合の比較

「国富論」初版		第1巻						第2巻			
ページ		85-86	113-114	149-150	357-358	367-368	471-472	17-18	543-544	553-556	563-566
グラスゴー版		±M3	±Q1	±U3	±2Z3	±3A4	±3O4	—	±3Z4	—	±4C2・3
Todd (1976)		±M3	±Q1	±U3	±2Z3	±3A4	±3O4	±D1	±3Z4	-4B1・2 +4B1・2	±4C2・3
東北学院大学 図書館	原裝アଙ୍କット版	±M3	±Q1	±U3	±2Z3	±3A4	±3O4	±D1	±3Z4	-4B1・2 +4B1・2	±4C2・3
	仔牛皮背表紙版	±M3	±Q1	±U3	±2Z3	±3A4	-3O4+ 3O4	-D1+D1	±3Z4	-4B1・2 +4B1・2	±4C2・3
一橋大学 社会科学古典 資料センター	メンガー文庫	±M3	-Q1+Q1	±U3	±2Z3	±3A4	-3O4+ 3O4	±D1	±3Z4	-4B1・2 +4B1	-4C2・3 +4C2・3
	フランクリン文庫	±M3	±Q1	±U3	-2Z3+2Z3	-3A4+3A4	±3O4	±D1	±3Z4	-4B1・2 +4B1	-4C2・3 +4C2・3
	T.U.C 1	±M3	±Q1	±U3	±2Z3	±3A4	±3O4	±D1	±3Z4	-4B1・2 +4B1・2	-4C2・3 +4C2・3
	T.U.C 2	-M3+M3	-Q1+Q1	-U3+U3	-2Z3+2Z3	-3A4+3A4	-3O4+ 3O4	-D1+D1	-3Z4+3Z4	-4B1・2 +4B1・2	-4C2・3 +4C2・3
	T.U.C 3	±M3	±Q1	±U3	±2Z3	±3A4	±3O4	±D1	±3Z4	-4B1・2 +4B1・2	-4C2・3 +4C2・3
明星大学 図書館	1	-M3+M3	-Q1+Q1	±U3	-2Z3+2Z3	-3A4+3A4	±3O4	-D1+D1	±3Z4	-4B1・2 +4B1・2	-4C2・3 +4C2・3
	2	-M3+M3	±Q1	-U3+U3	±2Z3	-3A4+3A4	±3O4	±D1	±3Z4	-4B1・2 +4B1・2	-4C2・3 +4C2・3

ことから、製本技術の優劣が第3表の結果となったと思われるが、増刷（二刷）の可能性もわずかながら残る。

スミスは、第3版の冒頭に付けた「Advertisement（お知らせ）」の中で、「初版は1775年の年末と1776年の年初に印刷された」と述べている。これは、おそらく前半（第1巻）と後半（第2巻）に分け印刷したという意味であろうが、年末に第1・2巻の印刷をいったん終え、増刷のために年初に第1巻・第2巻の印刷を再開したとすれば、この時に紙版を差し替え印刷製本した可能性が出てくる。このような想定が許されるとすれば、きれいに製本された一橋大学社会科学古典資料センター所蔵1セットは、初版増刷（二刷）になろうか？

初版増刷（二刷）についての精査は、（同センターの村瀬文庫を含め）多数の『国富論』初版の比較や書誌的考察等も必要であるので、ここでは、話題提供にとどめる。

4. 我が国の『国富論』初版のバリエーションと変造本

この節では、参考のために、これまでに知られている「出版者に関するバリエーション」と「表紙や目次の表記等に関する変造本」を紹介する。

前者の「バリエーション」は、一橋大学社会科学古典資料センター所蔵の村瀬文庫のものである。スミスは、1776年の『国富論』初版に関して、郷里エジンバラでも、友人W.クリークに対してその刊行を認めていたとされ、このエジンバラ版（正規版）第2版の表紙には、

PRINTED FOR W.STRAHAN; AND T.CADELL, IN THE STRAND,
AND W. CREECH, AT EDINBURGH

と印刷されている（W.クリークは、1774年の『道徳感情論』第4版からスミスの出版に携わっている）。各大学のOPAC検索等を行うと、日本の大学図書館の中でこれに該当するのは、上記センターの村瀬文庫の『国富論』第2巻のみである（第1巻には、「AND W. CREECH, AT EDINBURGH」の表記はない）。

このエジンバラ版については、Todd (1976) でも「ハーバード大学クレス文庫にはこの版も一部所蔵されている」と述べられている（p.17の注10）。クレス文庫のカタログを参照すると、確かに、初版第2巻が「7261番」として掲載され、上の旨が記載されている（Kelly (1964)）。しかしながら、*Goldsmiths' -Kress Library of Economic Literature*（ゴールドスミス・クレス文庫）のマイクロフィルム版には見あたらず、また、そのオンライン版の*The Making of the Modern World*で検索しても探し出せない。ゴールドスミス文庫とクレス文庫との重複を避けてマイクロフィルム版が作成された経緯からすれば、上のエジンバラ版は、ロンドン版と同一と見なされたためかも知れない。

後者の「変造本」は、大阪市立大学術総合センター（福田文庫）のものである。これについて福田徳三自身は、初版の重刷の可能性と第2版の可能性を併記しているが、守矢（1973）は、「第2版の目次+本文にいわゆる初版の目次以前（目次を含まず）の頁を付け加えて製本した第2版」の「偽本」と結論づけている。以下、大阪市立大学術総合センター（福田文庫）の『国富論』インターネット版に基づき論考するが、本稿の立場からすれば、この偽本は、初版ではなく、第2版そのものである。

この福田徳三にちなむ福田文庫には、2セットの『国富論』初版が所蔵されている。1セットは、第1巻にすべての目次が掲載され、第2巻には目次の掲載がない通常の『国富論』初版である。もうひとつのセットは、第1巻には第3編までの目次が掲載され、第2巻には第4編以降の目次が掲載されているタイプのものである（守矢（1973）に従い、以下、これを「B本」と呼ぶ）。

「B本」の第1巻から、通常版（正規版）に付けられた第2巻の目次が取り除かれているが、あまり違和感はない。通常版、「B本」ともに、表紙の次のページには、『道徳感情論』第4版の「お知らせ」が印刷されているが、奇異なのは、「B本」には、目次と本文のあいだのページにも、同じ「お知らせ」が印刷されていることである。通常版では「空白」であるべきページに、『道徳感情論』第4版の「お知らせ」が「再び」掲載され、その下に『国富論』の正誤表（ERRATA）が付けられているのである。この「お知らせ」と正誤表は、第2版と同じものである。「B本」の目次から本文までの構成も、第2版の構成とまったく同じである。しかも、本文は、通常版、「B本」、第2版ともに、1ページから510ページまでに印刷されているが、「B本」では、通常版の字句修正が行われ、第2版とまったく同じ内容になっているのである。言い換えると、「初版の表紙+（通常版に付けられた）『道徳感情論』第4版の「お知らせ」+第1巻の目次+（第2版に付けられた『道徳感情論』第4版の「お知らせ」・『国富論』の正誤表+第2版の本文）の構成である。「B本」の第1巻の目次は5ページまでであるが、校合からすれば、目次の2ページまでが（表紙を含め最初の2葉までが）初版のもので、目次の3ページ以降が第2版のもののように思われる。

第2巻では、通常版、「B本」ともに、中表紙の裏には、正誤表（ERRATA）が印刷されている。通常版第2巻には「目次」はなく、正誤表の次のページから本文が始まっている。本文は587ページまでであり、次の588ページのヘッダーには、「BOOKS printed for an sold by T.CADEL, in the Strand」と印刷され、T.カデルがロンドンの中心部で出版・販売している4つ折り本（QUARTO）11冊の書名と簡単な内容が紹介されている。これに対して、異本「B本」では、正誤表の次のページから4ページにわたって「第2巻の目次」が印刷され、その次が1ページから589ページまでの本文となっている。通常版に掲載された「BOOKS」の「お知らせ」は削除されている。

この異本「B本」は、第2巻の中表紙の裏の正誤表（ERRATA）までは、『国富論』初版の第2巻と同一であるが、目次より後は、『国富論』第2版とまったく同一である。言い換えると、まさしく、「初版の表紙・中表紙・正誤表+第2版の目次+第2版の本文」である。

このため、初版第2巻の467ページと488ページを訂正すべしとの正誤表は付けられているものの、該当ページは、それぞれ2ページずれている。しかも、エラーはすべて訂正され、『国富論』第2版と同文になっている。「B本」の正誤表は、それ自体が無意味になっている。この点から、初版の重刷の可能性も否定される。

金子（2005）は、「第2版の何部かが、上記のような手の込んだ作業を経て『国富論』初版として生まれ変わり、その一部が福田の手に落ちた」と述べているが、当時の慣行では、アンカット版を購入し各自が壮麗に製本する仕組みであったから、決して手の込んだ作業ではない。当時のロンドンの製本技術からすれば、「第2版」に「初版」の表紙等を付けて製本し、あたかも初版に見せることなどはたやすいことだったのであろう。「B本」は、こうした製本をすることで「初版」に見せかけ、古書としての価値を高めようとした「変造本」であると思われる。

このように福田文庫の「B本」は、「第2版」であって「初版」ではない。明白な「初版」のバリエーションは、一橋大学の村瀬文庫のエジンバラ版のみである。

5. 東北学院大学図書館所蔵の『国富論』1776年ダブリン版とドイツ語版

次に、東北学院大学図書館所蔵のダブリン版とドイツ語版について簡単に紹介しよう。

5.1 ダブリン版

1776年のダブリン版は、MessrsやWhitestoneら19名が発行したものである。出版にあたり採算割れを心配し、リスク分散を図ったことから多人数になったものと推測される。ロンドン正規版とは異なり3巻本で発行され、大きさも「横13cm×縦21.5cm」と正規版の半分以下になっている。正規版は重厚で気品があり大きくて重いものに対して、ダブリン版はほどほどの大きさであり持ち運びも容易であるが、装丁は貧相である。

第1巻は

i タイトル, ii (中) タイトル, iii-iv 目次, 1-391 本文, 392 空白ページ
というページ付けである。本文は、第3編第4章までを第1巻としたロンドン正規版とは異なり、

第1編までを収めている。目次も、ロンドン正規版のような全編の目次ではなく、この第1巻に対応した目次となっている。折りは「4葉」で、「折り記号」もロンドン正規版と同様の用法を採用している。

このダブリン版は、ロンドン正規版が出版された後に、スミスの許可を得ることなく、非正規版として出版されたものと考えられている。ロンドン正規版の出版後の出版であることから、正規版のようなページの差し替えはなく、切り取りや貼付のあとも見られない。

正規版と非正規版の異同について比較対照した研究は、非正規版を是認することにもつながることにもなるためか見当たらない。こうしたこともあり、ここでは、サンプル的に、ロンドン正規版において差し換えられた「6葉（12ページ分）」を取り上げ、異同をチェックすることにする。

この6葉（12ページ分）の比較では、テキスト上の相違はまったく見られないが、いくつかの英単語の活字の組み方に小さな差異が見られる（第4表）。ダブリン版の地名等には、「ハイフン（-）」が挿入される傾向が見られ、「ship carpenters」にもハイフンが挿入されている。

スミスが「understocked」、「underpeopled」と表記した単語は、ダブリン版ではハイフンが挿入され、「under-stocked」、「under-peopled」となっている。「定本」の「キャナン版」と「グラスゴー版」では、ともに、「under-stocked」、「under-peopled」が採用されている。

スミスは、『国富論』初版では「public」を旧い表現の「publick」と表記することが多かったが、「U3 (p.149)」の「publick law」については、なぜか「public law」と書いているのである（ダブリン版は、スミスの用法に従って、「publick law」としている）。

この「publick」と「public」に関して、「『国富論』第3版を底本」とする「グラスゴー版」では、全編で「publick」が採用され、「第5版を底本」とする「キャナン版」では、全編で「public」が採用されているのである。

第4表 ロンドン正規版とダブリン版の比較対照

葉	ロンドン正規版	ダブリン版	キャナン版 / グラスゴー版
M3	North America	North-America	North America
	New York	New-York	New York
	ship carpenters	ship-carpenters	ship carpenters
Q	North American	North-American	North American
	West Indian	West-Indian	West Indian
	understocked	under-stocked	under-stocked
	underpeopled	under-peopled	under-peopled
U3	public law	publick law	public law / publick law
223	publick	publick	public / publick
	the union	the Union	the union
3A4	差異なし		
3O4	差異なし		

5.2 ドイツ語版

次に、東北学院大学図書館所蔵の『国富論』ドイツ語版・初版を紹介しよう。

ドイツ語版・初版の*Untersuchung der Natur und Ursachen von Nationalreichthümern*は、J. F. Schiller とC.A. Wichman が翻訳したもので、1776年、ドイツ・ライプツィヒにおいて、Bey Weidmanns Erben und Reichによって出版された。J. F.シラー (Johann Friedrich Schiller (1737-1814)) は、高名な詩人Johann Christoph Friedrich von Schiller (1759-1805) の従兄弟であった (Hagemann (2017))。1776年春には、ドイツ語版第1巻が出版された。ロンドン版第1巻と同じく、第3編第4章までであった。シラーは、当時ロンドンに住んでいたと伝えられている。アドバンス・コピー等の何らかの便宜を図ってもらい翻訳作業を取りかかっていたものと見られ、『国富論』初版が1776年3月に出版されてまもなくのドイツ語版の出版であった (三邊 (1943))。第2巻は、遅れて2年後の1778年に出版された。

本学では、このドイツ語版・初版を「2セット」所蔵している。ともに、「横12.5cm×縦21cm」とダブリン版とほぼ同じ大きさのハンディな本であるが、紙質が悪い上に、麻糸綴じの製本で、ロンドン正規版のような気品さやダブリン版のような優美さの欠片もみられない。ドイツ語版も、ページの差し替えはなく、切り取りや貼付のあとも見られない。

第1巻は

i タイトル, ii 空白ページ, iii-viii 目次, 1-632 本文, 633-634 空白ページ
というページ付けである。

イギリスでは売れ行きの良かった『国富論』であったが、ドイツ語版の売れ行きは良くなかった。ドイツ語翻訳の質に大きな問題があり批判にさらされていた (三邊 (1943))。Hagemann (2017) によれば、カメラリスト (官房学派) からは無視され、ドイツの経済論争に影響を及ぼすことはほとんどなかったのである。また、Carpenter (1976) によれば、もともとドイツでは、スミスの影響は弱く、「スミスは、現在のところ、わが国の経済学説を変えさせるような影響力をもっていない。彼はたしかに引用され賞賛されているけれども、しかし、大勢には変化がないのであって、他の学説の方が、スミスよりも判り易いので、好まれている。」という状況にあったからである (p.22)。

6. 東北学院大学図書館所蔵の『国富論』第2版～第6版

6.1 ロンドン正規版

スミスの生前に第5版までが発行された。内容的には、1976年のグラスゴー版は、第3版以降に大きな変更がないとして、第3版を「底本」とし、キャナン版は、第5版がスミス生前の最後の版であったことから、第5版を「底本」としている。本稿では、スミス自身が第6版の校正まで関与したとするグラスゴー版の考え方を踏襲し、第6版までをひとつの区切りにする。

第2表に戻ると、『国富論』第2版～第6版は、表に明示された17大学によってほぼ所蔵されることが分かる。これ以外では、3～6大学が (第6版までの揃いではなく単冊あるいは複数冊で)

所蔵する状況が浮かびあがる。

第2版(1778年)は、初版と外観はほぼ同じであるが、第2巻の最終ページから「お知らせ」が取り除かれ、本文は細かな点で数多くの箇所が書き改められている。スコットランド風の表現からイングランド風へ表現への変更とも言われている。Todd (1976)によれば、“tear and wear”から“wear and tear”への語順の変更は、この例ということになる。

以下、小稿では、言語学的な論考を避け、『国富論』の中の「日本の銅」の価格がヨーロッパの銅の価格に影響を及ぼすことを記述した箇所を取り上げ、表現が変わったことのみを見てみよう。

初版 (p.211) とダブリン初版 (p.252) の

The value of a coal-mine to proprietor *depends frequently* as much upon its situation as upon its fertility.

に対して、第2版以降では、

The value of a coal-mine to proprietor *frequently depends* as much upon its situation as upon its fertility.

と書き改められている。また、この6行あとの

The copper of Japan makes an article *in the commerce of Europe*;

に対しては、

The copper of Japan makes an article *of commerce in Europe*;

となっているのである。

第2版の校合の詳細については説明を省くが、グラスゴー版やTodd (1976)では、第1巻の H^4 ($\pm H4$)、 $2E^4$ ($\pm 2E2 \cdot 3$)、 $2M^4$ ($\pm 2M2 \cdot 3$)、 $3T^4$ ($-3T4$)の4箇所、第2巻の $4F^4$ ($-F4$)の1箇所に差し替え箇所が見られるとしているので、本学所蔵第2版についてこれをチェックすることにとどめよう。

本学所蔵の第2版第1巻の $H4$ 、 $2M2 \cdot 3$ 、 $3T4$ と第2巻の $F4$ の葉には、切り取り痕や貼付は見られない。ただし、 $2M2 \cdot 3$ の葉は、前後の葉と比較すると、いく分短めの葉である。また、 $3T4$ と $F4$ の葉は、それぞれ、第1巻と第2巻の最後の葉である。白紙の2ページであることから、切り取り・貼付ではなく、「抜き取り ($3T4$ と $F4$ に付けられたマイナス記号)」である。抜き取られ製本されても、特段の違和感はない。

ところが、本学所蔵の第2版第1巻の $2E2 \cdot 3$ の葉は、製本ミス・乱丁の葉であり、差し替えの痕が明白に残されている。当初、ページ番号が「211 ~ 214」と印刷されたものが、差し替えの際に2葉の裏と表が逆になり、ページ番号も「214, 211, 212, 213」として製本されたのである。

第3版(1784年)は、内容が大きく書き改められるとともに、3巻本となり、サイズも8つ折り初版や第2版のほぼ半分の大きさになった。索引作成の専門家John Noorthouckによって59ページに及ぶ索引も付けられた (Todd (1976), p.11)。初版と第2版の購入者のために「増補と訂正」が発行され、2シリングで発売された。第3版は、「増補と訂正」を取り入れたものであり、「増補と訂正」と同時に発売されたものである。第3版第1巻の表紙と目次のあいだのページには

「Advertisement (お知らせ)」が掲載され、初版の印刷の時期 (1775年末と1776年初) や第3版の特徴が述べられている。この後、正誤表 (ERRATA)、目次、本文が掲載されている。第1巻本文は、第1編第1章から第2編第2章まで (1ページ～499ページまで) である。第2巻と第3巻のページ付けの詳細説明は省略するが、第2巻本文は第2編第3章から第4編第8章まで (1ページ～518ページまで)、第3巻本文はそれ以降から第5編第3章 (1ページ～465ページまで) までである。第3巻の最終ページは、「道徳感情論」についての「お知らせ」が載せられている。

第4版 (1786年) は、第3版と内容的な変更はないが、第3版の「Advertisement」は「Advertisement to the third edition (第3版のお知らせ)」と変更され、次のページには「Advertisement to fourth edition (第4版のお知らせ)」が加えられている。第3版のミスプリントは直され、第3版に付けられていた正誤表 (ERRATA) は削除されている。

第5版 (1789年) は、第4版とほぼ同様であるが、ミスプリントが直されている。また、「第3版のお知らせ」と「第4版のお知らせ」は、それぞれ、1ページに収められ印刷されていたが、この第5版以降は、それぞれ、同文のものが2ページを使って印刷されるようになる⁵⁾。

第6版 (1791年) は、スミスが校正を行ったものの逝去後に出版されたものである。内容それ自体は、第5版とほぼ同じであるが、例えば、第6版では、第1編第5章の一節「corn is a better measure than silver」の「a」が省略され、第10章第2部の一節「in Europe or in America」の2つめの「in」も省略されている (1976年グラスゴー版『国富論』第1巻のp.54とp.173による)。

本学所蔵の第6版の第3巻の末尾には、*The Following Valuable Books are printed for A. Strahan and T. Cadell, in the Strand, 1792*というパンフレットが合綴され製本されている。これは、ストラーンとカデルが出版した数十冊の書名とその概要を紹介した16ページほどのパンフレットである。筆者が初めて第6版をチェックした際、製本技術が優れていたために、合綴にはまったく気づかなかったが、第6版とパンフレットの出版年の違いから合綴を確認した次第である。

6.2 海外版とNew Edition

ところで、第2表のように、本学は、『国富論』第2版～第6版の中で第5版 (1789年) を欠くが、ダブリン発行の第5版 (1793年) を所蔵している (このダブリン版第5版は、本学を含め日本では、9冊が所蔵されている)。また、これ以外にも、海外版として、1789年にThomas Dobsonによってフィラデルフィアにおいて発行されたNew Edition、1791年によってバーゼルで発行された第4版、1801年にダブリンで発行された第6版を所蔵している。これらの日本の大学での所蔵数 (本学を含む) は、それぞれ、3冊、7冊、4冊と極めて少ないが、小稿では、New Editionに絞って考察する。

フィラデルフィア発行のNew Editionは、最初のアメリカ版『国富論』である。本学所蔵の『国

5) 第5版については、*The GoldSmiths' -Kress library of Economic Literature* (ゴールドスミス・クレス文庫) のマイクロフィルム版やオンライン版の*The Making of the Modern World*を参照した。なお、ゴールドスミス・クレス文庫については、第9節で詳しく紹介する。

富論」には、3巻ともにLeonard Jarvis の署名があり、第2巻と第3巻の表紙にもL. F. Jarvis の署名がある。さらに第1巻の表紙裏の最初のページには、

A Lincoln

20st September 1833

721

と手書かれた紙片が貼付されている。アメリカ大統領リンカーンのものにはほぼ間違いのない署名である。紙片に書かれた「20st」が気になるところではあるが、署名の下は、購入日と蔵書番号であろうか。1833年は、1789年のNew Edition出版から40年以上も後になるが、リンカーンが独学で法律を学び始めた時期にあたることから、広い教養を身につけようとして、Leonard Jarvis から『国富論』を譲り受け読み始めたのであろうか。あるいは、Jarvisが、ジャクソニアン・デモクラシーを展開したジャクソン大統領（在職期間1829-1837年）を支持し、ジャクソニアンとして下院議員（メイン州選出）に当選した人物であったことからすれば、リンカーンも、ジャクソニアン・デモクラシーの影響を受け、スミスの思想を知ろうとしたのであろうか。それとも、リンカーン自身が署名した紙片をわざわざ切り取り、それを貼付するのは不自然であることから、誰かがどこかで手に入れたリンカーンの署名を貼付し、古書としての価値を高めようとしたのであろうか。謎は深まる。

ところで、この1789年発行のNew Editionは、同年発行のロンドン正規版第5版なのか、それとも1786年の第4版なのか。

第4版と第5版の外形的な相違は、第1巻の「第3版のお知らせ」と「第4版のお知らせ」の印刷が、それぞれが、1ページか（第4版）、それぞれ、2ページか（第5版）という点と、「正誤表（ERRATA）」が付けられているか（第4版の第1巻・第2巻）、この正誤表がないか（第5版）という点になる。他方、New Editionの2つの「お知らせ」は、第4版と同じで、それぞれ、1ページに収まっているが、第4版の「正誤表（ERRATA）」は付けられていない。

確認のためには、New Editionと第4版、第5版を直接に照合することが求められるが、時間的制約のために困難である。New Edition（第1巻）から数か所をサンプル的に抽出し、キャンナン版（『国富論』第5版を底本）と1976年グラスゴー版（『国富論』第3版を底本）等の注記を踏まえて判別することを試みる。

まず、

that, . . . , *are*, in point of . . . , evidently under-recompenced (New Edition, p.139) の「are」に関しては、グラスゴー版第1巻（p.123）は、「are」を採用し、第5版と第6版では「is」との「注」を付けている。これに対して、キャンナン版第1巻（p.108）は、「is」を採用し、初版～第4版では「are」との「注」を付けている。つまり、初版～第4版が「are」、第5版と第6版が「is」ということになる。本学所蔵の第4版を確認すると、確かに「are」である（p.161）。これにより、New Editionが初版～第4版であることが含意される。

次に、

But any man *were* to sell such a bargain for such a price, (New Edition, p.176) の「were」に関しては、グラスゴー版第1巻 (p.149) は、「was」を採用し、第4版～第6版では「were」との「注」を付けている。他方、キャナン版第1巻 (p.134) は、「were」を採用し、初版～第3版では「was」との「注」を付けている。つまり、初版～第3版が「was」、第4版～第6版が「were」ということになる。本学所蔵の第4版も、確かに「were」である (p.207)。これにより、New Editionが第4版～第6版であることが含意される (ただし、第6版は、New Editionの2年後に出版される)。

さらに、

The constancy or inconstancy of employment cannot *affect* the ordinary profits of stock (New Edition, p.137)

の「affect」に関して、グラスゴー版第1巻 (p.122)、キャナン版第1巻 (p.106) とともに、「affect」と表記し、『国富論』第5版が「effect」と印刷されているとの「注」を付けている (第5版を底本とするキャナン版では、Misprinted 'effect' in ed. 5.としている)。これにより、New Editionが第5版ではないことが含意される。

これらのことから、1789年にフィラデルフィアにおいて発行されたNew Editionは、第4版ということになる。

ところが、キャナン版のミスプリントがこの判別を混乱させることにもなる。すなわち、Their competition reduces *the* profit below what is sufficient to compensate the risk. (New Edition, p.137)

の「the」に関しては、グラスゴー版第1巻 (p.128)、キャナン版第1巻 (p.112) とともに、「the」を採用している。ところが、グラスゴー版では第5版と第6版が「their」の「注」を付け、キャナン版では第4版と第5版が「their」とした上で、「doubtless a misprint」の「注」を付けているのである。キャナン版に従えば、『国富論』第4版は、「their」でなければならないが、考察対象のNew Editionでは、「the」である。これを確認するために本学所蔵の第4版と第6版を参照すると、第4版のp.170では、「the」であるが、第6版のp.170は、「their」であった。したがって、キャナン版第1巻 (p.112) の注は、まったくの「ミスプリント」であり、訂正されなければならない。この訂正が行われると、サンプリング的な抽出手法でもほぼ確実にNew Editionを第4版と比定することができることになる。

7. 出版事業としての『国富論』

ところで、出版事業としての『国富論』はどうであったのか。

『国富論』初版から第3版までは、ウィリアム・ストラーンとトマス・カデルによって出版され、第4版 (1786年) から、ウィリアム・ストラーンから息子のアンドリュー・ストラーンに出版が引き継がれている。

初版と第2版は、2分冊 (2巻本) で、大きさも4つ折りサイズで発行されたが、第3版以降は、上述のように3分冊 (3巻本) であった。大きさも8つ折りサイズとハンディなものになっている。

第5表 出版事業としての「国富論」

バージョン	出版年	発行部数	価格	売上額	印刷費	利潤 (Toddの計算方式)
初版	1776年	500 (一説に1,000)	1ポンド16シリング	£900	£117.04.0	£782.16
第2版	1778年	500	1ポンド16シリング	£900	£117.04.0	£782.16
第3版	1784年	1,000	18シリング	£900	£139.16.6	£760.03.4
第4版	1786年	1,250	18シリング	£1,125	£156.00.0	£969.00.0
第5版	1789年	1,500	18シリング	£1,325	£170.18.0	£1,179.02.0
第6版	1791年	2,000	18シリング	£1,800	£200.06.0	£1,599.14.0

(資料出所) Todd (1976), p.15及びグラスゴー版『国富論』第1巻, pp.62-64

(注1) 1ポンド (£) = 20シリング

(注2) 初版～第5版については, Todd (1976) を引用し, 第3版の「利潤」の値を修正した。

(注3) 第6版のデータは, グラスゴー版による。

これにともない, 価格改定が行われる。

価格は, 初版と第2版は, 2冊で「1ポンド16シリング=36シリング」であったが, 第3版以降は, 3冊で「18シリング」で発売された。実に50%の価格の引き下げが行われたのである。周知のように, 需要の価格弾力性が2ならば, 『国富論』の売上額は変わらない。第3版の発行部数は, 第2版から倍増したから(第5表を参照), 初版, 第2版, 第3版の売上額は, いずれも, 900ポンドになる。印刷費は, ストラーン元帳 (Strahan printing ledger) から判明する (Todd (1976), p.15 及びグラスゴー版『国富論』第1巻, pp.62-64)。第3版は, 印刷費が増加したことにより, 利潤は22ポンドほど減少し, Todd流の計算では, 第3版の利潤は760ポンドであった。第4版以降は, 発行部数を順調に増やしている。1冊あたりの印刷費が低下したことにより, 第5版の利潤は, 1,180ポンドにまで増加している。

初版から第5版までの『国富論』出版(ただし, 『増補と訂正』を含まない)によって得られた利潤合計は, 4,473ポンド16シリング6ペンスであった。このうち, スミスの取り分は, 2,095ポンド10シリング9ペンスであった(スミスは, 初版は300ポンドを, 第2版～第5版は利潤の半分を受け取る約束を出版元としていた)。Todd(1976)は, これについて, 「後生のどの時代にも賞賛され, また時に追隨されることになる, 彼の経済理論の実演なのだと言ってよいのではないだろうか。(p.16)」と結んでいるが, 従来の50% off の価格設定も, このスミスの取り分に大きな影響を及ぼしており, 経済理論の実演は, この価格設定から始まっているのである。

なお, 第6版は, 発行部数2,000であったから, 売上額は1,800ポンドになる。印刷費は200ポンド余であったから(グラスゴー版『国富論』第1巻のp.64), 上のTodd流の計算をすれば, 利潤は, 何と1,600ポンドに達する。

8. 出版の独占から独占的競争へ: 『国富論』(第7版～第11版)

『国富論』についての関心は, せいぜい第6版までであり, スミスの手を「完全に」離れた第7版以降についての研究は少ない。この節では, 著作権に着目し若干の私見を述べるが, まずは,

第7版～第11版の外形的な特徴から紹介しよう。

先に、第3版～第6版は、3分冊（3巻本）でハンディなものであったことを紹介したが、第7版～第11版も3分冊（3巻本）であった。

第7版～第10版の校合は、基本的には、第3版と同じであった。相違点は、第7版・第8版・第10版において、各巻の「表紙」の「葉」の前に、シンプルな「表紙」が印刷された「葉」が挿入されていることと、第9版では、このシンプルな「表紙」の代わりに「スミスの肖像」が印刷されていることにある。第7版～第10版の内容も、第6版（基本的には第3版）と変わらないが、「edition（版）」と付けられた最後のバージョンである第11版は、内容も校合も大きく変わっている。これについては、後で述べる。

出版年の表記は、初版（1776年）～第9版（1799年）の18世紀の出版物は、ローマ数字表記（例えば、「1776年」を「MDCCLXXVI」とする表記）がとられていたが、19世紀に入り、第10版と第11版は、「1802」、「1805」のようにアラビア数字表記に替わっている。

出版元の変遷は、第6表の通りである。先に紹介したように、初版から第3版は、ウィリアム・ストラーン（スミスのスコットランド人の友人）とトマス・カデルによって出版されたが、第4版（1786年）から、息子のアンドリュー・ストラーンに出版が引き継がれ、第7版（1793年）まで、A.ストラーンとT.カデルによって出版されている。第8版（1796年）は、第6表の記載のように、T.カデルからカデル・ジュニアとW.ディビスに出版が引き継がれている。すなわち、

T. CADELL jun. and W.DAVIES (Successors to Mr. CADELL) in the Strand.
 である。第9版（1799年）も同様であったが、「Successors to Mr. CADELL」は削除されている。
 ところが、第10版（1802年）は、

Printed by A. Strahan, Printers-Street;

FOR T. CADEL JUN. AND W.DAVIES, IN THE STRAND.

と変化している。出版は、カデルとディビスが担い、ストラーンは、出版から外れ印刷のみを担

第6表 出版者と印刷者

バージョン	出版年	表紙の出版者の記載	印刷者に関する記載
初版・第2版	1776～1778年	PRINTED FOR W. STRAHAN; AND T. CADELL, IN THE STRAND.	
第3版	1784年	Printed for W. STRAHAN; and T. CADELL, in the Strand.	
第4版～第7版	1786～1793年	Printed for A. STRAHAN; and T. CADELL, in the Strand.	
第8版	1796年	Printed for A. STRAHAN; and T. CADELL jun. and W.DAVIES (Successors to Mr. CADELL) in the Strand.	
第9版	1799年	Printed for A. STRAHAN; and T. CADEL jun. and W.DAVIES in the Strand.	
第10版	1802年	Printed by A. Strahan, Printers-Street: FOR T. CADEL JUN. AND W.DAVIES, IN THE STRAND.	Printed by A. Strahan, Printers-Street.
第11版	1805年	PRINTED FOR T. CADEL AND W.DAVIES, IN THE STRAND.	Strahan and Preston, Printers-Street.

うことになったのである。第1巻の最終ページ、第2巻のAPPENDIXの最終ページ、及び第3巻のINDEXの最終ページのそれぞれの「左下」には、

Printed by A. Strahan,
Printers-Street. (もしくは、Printers-Street, London.)

の2行が印刷されているのである。

第11版(1805年)では、表紙からもストラーンが消え、出版元は、T.カデル・ジュニアとW.デビスになっている。印刷も、ストラーンとプレストンの共同になる。すなわち、各巻の表紙の裏とそれぞれの最終ページの「左下」、計6箇所には、

Strahan and Preston,
Printers-Street.

の2行が印刷されているのである。

この出版元の変遷をどのように解釈すべきなのか。ウィリアム・ストラーンは、スミスのスコットランド人の友人とされているが、下院議員も務めるロンドンの有力な出版者でもあった。1790年頃までには、本学所蔵第6版に合綴されたパンフレット*The Following Valuable Books are printed for A. Strahan and T. Cadell, in the Strand, 1792*が示すように、ストラーン(家)とカデル(家)は、「共同」で出版事業を行い、すでに数十冊以上も著名な書物を発行していたのである。

出版事業に関するリスクの分担割合は不明であるが、上でみたように、印刷はストラーンが、また、『国富論』第2巻の最終ページの「BOOKS printed for an sold by T. CADEL, in the Strand」から分かるように、書籍の販売はカデルが担っていた。ストランド(the Strand)は、ロンドン中心部のトラファルガー広場から王立裁判所・(紅茶の)トワイニング本店通りまでの1.2キロメートルほどの通りであることから、カデルは、この通りに書店を構え、イギリス(グレートブリテン王国)中に書籍を販売していたのである。

ところで、1707年、イングランド王国とスコットランド王国が合併し、グレートブリテン王国が誕生したが、その2年後には、世界で最初の本格的な著作権法(アン女王法)が制定され、1710年から施行された。著作権を印刷業者ではなく、著者にあるとしたものであった。具体的に言えば、この法律施行後に印刷された著作物には、14年間の著作権が認められ、かつ、14年目が経過した時点で著者が生存していれば、さらに14年間の著作権が認められたのである。

スミスは1790年7月17日に逝去したが、『国富論』初版発行の1776年から14年ちょうど経過した時期であった。形式的には、スミスの著作権は、1804年まで保護されることになったのである(実際の著作権の継承者が、相続人か被譲渡者か出版者なのかは不明であるが、形式的には、1804年まで著作権が保護され、第三者が『国富論』を出版することは不可能であった)。

第9版(1799年)までの出版事業は、スミスが認めた出版者(ストラーンとカデル、あるいはその継承者)によって行われて、継続されてきた。第10版(1802年)は、これまで『国富論』の紙版を作成し印刷を担っていたストラーン(家)が印刷に専念し、出版のリスクは、カデル(家)が負うことになったのである。著作権保護のもと、著作物の出版を独占してきたストラーン(家)

にとって、著作権切れによって新規参入が増え、過剰な在庫をかかえることのリスク回避であったのであろうか。ともかくも、第10版の出版において、それぞれが得意分野（印刷と販売）に特化することで、出版のリスク分散が図られたのである。

『国富論』の著作権が切れると、1805年には、「第11版（正規版）」のほか、「ロンドン版」、*「Glasgow : at the University press」*の「new edition」、グラスゴー版の「new edition」の4種類の『国富論』が出版される。『国富論』出版の「自由な競争」への転換である。

正確に言えば、現代のミクロ経済学の完全競争の概念の理論的前提となる「同質性」は欠如していたから、「製品差別化」を競う「独占的競争」への転換である。

1805年の「ロンドン版」は、従来の第10版（正規版）と何ら変わるところがなかったが、競争の時代に入ったことを意識した『国富論』第11版（正規版）には、第10版から引き継いだ「第3版のお知らせ」「第4版のお知らせ」のほか、「この版のお知らせ」も付けられ、さらに「Preface」のほか、W.プレイフェア（William Playfair）による26ページに及ぶ小論 *The Life of Dr. Smith* が加えられている。脚注と3つの補論も付け加え、内容の充実が図られている。

*「Glasgow : at the University press」*の「new edition」には、27ページに及ぶ *Life of the Author* と、同じく27ページに及ぶ *A View of the Doctrine of Smith compared with that of the French Economists* と題する小論が付けられている。この2つの小論は、翌年にエジンバラにおいて出版された（出版者が異なる）バージョンにも引き継がれていく。この版の「お知らせ」は、これまでのものを取り込んで書かれているが、最後のパラグラフは、

THE Celebrity which the “Wealth of Nations” has acquired, precludes the necessity of any recommendation on the part of Publishers. — Its extensively sale is a sufficiently proof of the popularity of the Work, having already undergone no less than Eleven Editions in London.
と結ばれており、第11版（正規版）を意識したものとなっている。

グラスゴー版の「new edition」は、4分冊となり、ハンディさ・利便性を向上させている。中扉には、ジャームズ・タッシーのメダリオンを基にしたエレガントなスミスの肖像（微小な字で “*from Tassie Medallion*” のキャプチャーが付けられたスミスの肖像）が印刷されている。スミスの肖像が掲げられた最初の版（『国富論』英語版）である。

東北学院大学図書館蔵のジャームズ・タッシー（1735-1799年）の楕円形の陶磁器製の肖像メダリオンは、1787年にグラスゴーで制作されたものである。陶磁器製の肖像メダリオンなので、陶磁器色（オフ・ホワイト色）であるが、1805年のグラスゴー版の「new edition」の肖像は、スミスの着衣が黒く着色されて、印刷されている。タッシーは、数種類のスミスの肖像メダリオンを制作したとされているので⁶⁾、本学所蔵の肖像メダリオンと同一物を基にして、グラスゴー版の「new edition」の肖像が印刷されたとは必ずしも断定はできないが、両者は似ている。

6) スコットランド国立肖像画美術館には、1787年制作の2種類のスミスの肖像メダリオンが展示されている（肖像画美術館を統括する「スコットランド国立美術館」のホームページ上で閲覧可能となっている）。なお、本稿の冒頭で紹介したように、2007年3月から、このメダリオンをもとにしたスミスの肖像が、イギリス20ポンド紙幣の裏面に印刷されている（表面は、エリザベス女王の肖像である）。

このように、『国富論』初版から30年も経つと、人々は、スミスの著作の単純な再生産よりも、優れた解説や肖像を望むようになり、2次的著作物に関する競争の時代に突入するようになったのである。

2次的著作物の違いによる「製品差別化」を競う「独占的競争」に終止符を打つ試みは、1811・1812年に刊行されて『アダム・スミス著作集』であった（詳細は第15節を参照のこと）。この『著作集』は、これまで『国富論』や『道徳感情論』の出版に携わった者たちが協力し合い、アダム・スミス全集を発行したのである（『国富論』は、『著作集』の第2巻～第4巻として発行された）。学術的には、アダム・スミスの著作の集大成・完成形であり、その発刊の意義も大きい。加えて、出版事業としては、出版の継承者を誇示することによって新規参入者に対する障壁を設定する意味があったと解すべきであろうが、独占的競争に終止符を打つことはできず、『国富論』の出版競争は激化していく。

9. ゴールドスミス・クレス文庫とアダム・スミス・コレクション

「ゴールドスミス・クレス文庫 (*The Goldsmiths' -Kress library of Economic Literature*)」は、ケンブリッジ大学教授のH.S.フォクスウェルが収集した15世紀から1850年までの社会科学文献6万点以上のコレクションである。フォクスウェルの没後、このコレクションがロンドン大学の「ゴールドスミス文庫」とハーバード大学経営大学院の「クレス文庫」とに分けて所蔵されていた経緯から、*Goldsmith' -Kress library of Economic Literature*という名称になっている。

『国富論』刊行200年後の1976年に、このマイクロフィルム版が Research Publications, Inc.から発行された。マクロフィルム版も壮大で多岐にわたるが、もっともポピュラーなガイド版 *A consolidated guide to segment I* を「CiNii検索」にかけると、41の大学図書館が抽出されるが、このシリーズのすべてのマイクロフィルムを所蔵する大学は、6大学ほどに過ぎない。「CiNii検索外」では、慶應義塾大学でもガイド版にとどまっておらず、東北学院大学は数少ないフルスペックの所蔵館になっている。

近年では、学内LANからゴールドスミス・クレス文庫のオンライン版である *The Making of the Modern World* への接続も可能になっており、これを利用する大学も多い。*The Making of the Modern World* では、フォクスウェルが収集したコレクションは、MOMW I (1450-1850)として分類され、また、のちに追加された1851年以降の文献は MOMW II (1851-1914)として分類されている。本学の学内LANからも、当然に接続可能である。

実際に、MOMW I を使って “an inquiry into the nature and causes of the wealth of nations” で検索すると、1776年の『国富論』初版から1848年刊行の『国富論』まで、出版年や出版地が異なるバージョンの英語版59点が抽出される（MOMW II では、1863年版1点のみ抽出される）。

他方、東北学院大学図書館所蔵のアダム・スミス・コレクションでは、初版から1850年刊行の『国富論』までの34点である。当然、ゴールドスミス・クレス文庫の収集数に及ばない。しかしながら、本学のアダム・スミス・コレクションのうち、ゴールドスミス・クレス文庫に収められ

ていない『国富論』も4点ほどあるので、これらを紹介する。

[1] まずは、1801年にダブリンで発行された『国富論』第6版である。これについては、すでに第6節で紹介したように、日本国内の所蔵数は、4冊と極めて少ない。

[2] 前節では、1805年に『国富論』の著作権が切れ、2次的著作物に関する競争の時代に突入したことを述べたが、この前年の1804年に、アメリカのハートフォードにおいて『国富論』 new editionが発行されている。2分冊だったが、本学では、第1巻を所蔵している。この第1巻も、日本国内の所蔵数は、4冊と極めて少ない。

[3] [4] 最後は、1846年と1850年にエジンバラにおいてAdam and Charles Black, and William Taitによって発行された『国富論』（全1巻、2段組版）である。ともに、J.R. McCullochによる序文(Preface)のほか、*A Life of the Author*と*An Introductory Discourse, Notes, and Supplemental Dissertations*という2次的著作物が付けられている。このために、「マカロック版」とも呼ばれるが、1846年版の日本国内の所蔵数は、3冊と少ない（1850年版は、11冊である）。これらのマカロック版には、スミスの肖像に加え、机に手を付くスミスの立像も印刷されている。なお、ゴールドスミス・クレス文庫を参照すると、1828年のエジンバラ・ロンドン版（4巻本）が最初のマカロック版であり、1838年版以降の版に、スミスの立像が印刷されていることが判明する。

ちなみに、本学所蔵の1831年版、1839年版、1840年版の『国富論』は、ゴールドスミス・クレス文庫にも収められているが、日本国内の所蔵数は少ない。順に、2冊、1冊、2冊である。いずれも、エジンバラで発行された「全1巻、2段組版」であるが、出版者は、1831年版と1840年版がT. Nelson、1839年版はRoss & Co.と異なっている。

10. 『国富論』1863年版と『経済説略』

東北学院大学図書館所蔵のアダム・スミス・コレクションにおいては、1863年版の『国富論』が最も新しいバージョンである。先に紹介した1846年と1850年にエジンバラで発行された『国富論』と、印刷エラーが訂正されたことを除けば、同じ内容である。全1巻、2段組の体裁で、J.R. McCullochによる、*A Life of the Author*等の2次的著作物が付けられ、出版者はAdam and Charles Blackであった。このマカロック版の日本国内の所蔵数は、34冊と多い。以下では、本学のアダム・スミス・コレクションを離れ、『国富論』1863年版等に関するいくつかのエピソードを紹介する。

我が国に最初に『国富論』を紹介した人は、おそらくシーボルトであろうと思われる。1859（安政6）年に再来日し、文久2（1862）年に、長崎・出島のオランダ印刷所から*Catalogue de la bibliotheque, apportée au Japon par F. de Siebold*（『シーボルト将来本目録』）を出版したが、この中に、J.B.セイやK.H.ラウの著書名とともに、1846年にライプツィヒで発行されたドイツ語訳『国富論』の書名*Untersuchung über das Wesen und die Ursachen des Nationalreichthums*が記載されていたからである（三邊（1943））。東京国立博物館情報研究アーカイブズの検索画面から「シー

ボルト将来本目録リスト番号・目録記載内容」にアクセスすると、確かに、これらの著者・書名を抽出することができる。ドイツ語訳『国富論』は、目録リスト番号661で「冊数2」である。このドイツ語訳は、1846-47年のマックス・スティルナー (Max Stirner) 訳と思われるが、もともとは、表紙に*Die National-Oekonomen der Franzosen und Engländer*の書名が印刷され、中表紙に*Untersuchung*・・・が印刷された4巻本であったから、シーボルトが長崎に持ち込んだドイツ語訳『国富論』は、1846年発行の第1巻と第2巻ということになる。シーボルトの蔵書は、明治2年に長男アレキサンダー・シーボルトから外務省に寄贈された後、東京帝室博物館とドイツ東アジア協会 (現在のOAGドイツ東洋文化研究協会) とに移管・管理された (向井 (1988))。ドイツ語訳『国富論』は、ドイツ東アジア協会において管理されていたが (三邊 (1943))、OAGの戦災により事務所ともに、蔵書の大半を焼失したのである (向井 (1988))。

我が国に最初に伝わり現存する『国富論』は、静岡県立中央図書館葵文庫蔵の『国富論』1863年版である (三邊 (1943), 大河内 (1976), 杉原 (1977), 金子 (2005))。幕府「開成所」から「静岡学校」へ移管された書であり、確かに「開成所」, 「静岡学校」の蔵書印が押されている (静岡県立中央図書館HP)。開成所は、安政3 (1856) 年2月の蕃書調書, 文久2年6月の洋書調書を経て、文久3 (1863) 年8月に開成所となった幕府の洋学教育機関 (現在の東京大学の源流のひとつ) である。旧幕府は、明治元 (1868) 年10月、徳川家の静岡70万石への移封にともない、静岡学問所 (漢学・国学・洋学の教育機関) と沼津兵学校 (静岡藩の陸軍将校養成機関) を開設し、ここに開成所の蔵書を移管するとともに、教師も移動させたのである。

文久2年 (1862) 年に、幕府は、軍艦操練所から榎本武揚ら5名、洋書調書から西周と津田真道の2名、さらに長崎で医学修行中の林研海ら2名をオランダ留学生として派遣する。西周と津田真道の2名は、フィッセルングの指導の下に、治国学 (政治学) の5科目 (1. 天然の本分 (性法学), 2. 民人の本分 (万国公法), 3. 邦国の法律 (国法学), 4. 経済学, 5. 経国学 (統計学)) を学ぶ (『津田真道全集 上』, pp.91-92)。ふたりは、日本人として正式に外人教師による経済学の講義を受けた最初の人であったことから (三邊 (1943))、『国富論』1863年版も、このふたりのよって開成所に持ち込まれたとの推論も出てくる (金子 (2005))。ふたりは、慶応元 (1865) 年に帰国するが、津田は、開成所教授手伝から教授職に昇格し、明治元 (1868) 年には、静岡学問所頭取に就き、西も、開成所教授職等を経て、同年、沼津兵学校頭取に就く。まさに、先の「開成所」, 「静岡学校」の蔵書印に対応する教授陣の動向である。さらに、翌明治2年には、渡辺一郎 (別号・渡辺温, 沼津兵学校一等教授並) によって、*The Compendium of Political Economy from the Lesson Book* (和文書名は『経済説略』) が編纂され、教科書 (和綴じ本) として使われたのである。東北学院大学図書館所蔵の『経済説略』(明治2年版) を確認すると、『国富論』第1編第1章“*Of the Division of Labour*”の“Observe”から始まる最後のパラグラフ (初版のpp.13-15) が、pp.62-65に“*LESSON XII DIVISION OF LABOUR*”として転載されている。これについて、大河内 (1976) は、「その引用の最後には ‘… ten thousand naked savages. —SMITH’ とスミスの名前が明記されている」ことから「スミスの『国富論』からの意識的引用であることがうか

がわれる」とし、三邊（1943）は、「これが前述「静岡学校」蔵、マカラック編『国富論』1863年新版から引かれたものであることは疑ひあるまい」と断定している。このように、我が国の教育機関において、アダム・スミスの文章が直接に読まれたのは、マカラック編『国富論』の一節を採録した『経済説略』を通してであった。

ところで、三邊（1943）によれば、わが国で最初にスミスの名前と『国富論』の書名が教場で語られたのは、慶応4（1868）年頃の慶應義塾とされている。福澤諭吉は、慶応3年に幕府の軍艦受取委員（通訳）として渡米した際に、多数の洋書を購入し帰国したが、購入した書籍の中には1866年版のFrancis Waylandの*The Elements of Political Economy*（フランシス・ウェーランド著『経済学要論』）数十部が入っていたのである。『経済学要論』では、釘鍛冶の例が引用され、スミスの分業論が紹介されていたのである（三邊（1943））。この著書の2003年復刻版を確認すると、確かに、‘of Division of Labor’の節（pp.72-80）が設けられており、‘Adam Smith’s “Wealth of Nations”の記述もなされている（p.79）。福澤自身が、この書を使って、火・木・土曜日の午前10時から12時まで講義していた（慶応4年5月の上野での彰義隊戦争の日も、この講義が粛々と行われた）。『経済学要論』は、自己の学説を展開する専門書ではなく、ウェーランドがこの書のpreface冒頭に記しているように、ブラウン大学4年生を対象とした経済学講義を主な内容としたものであった。いわば、アメリカ最初の経済学の教科書というべき書であり、初刊から30年間で5万冊を売り上げた教科書のベストセラーであった（三邊（1943））。

慶応3年1月の福澤諭吉の渡米の際、仙台藩はアメリカでの銃器等の買い付けを依頼したが、福澤は、仙台藩江戸留守居役・大童信太夫と相談の上、その費用で洋書を買付ける（高橋（2018）、p.328）。福澤は、6月に帰国するが、渡米中、上司の小野友五郎と折が合わず、また、大量の洋書等の荷物を持ち込んで帰国したことから、小野の訴えにより、蟄居謹慎を申し渡され、荷物は神奈川奉行預かりとなる。荷物の件も含め、事態が収拾したのは、翌慶応4年に入ってからのことである。金子（1979）によれば、福澤は、慶応4（1868）年6月頃に、自分自身の身分が安定したことから、大童宛に書籍代金の計算書を出し書籍を引き渡すが、この時、作成された目録が、『藩学養賢堂蔵洋書目録』である。目録の英書数は42点にとどまるが、藩校・養賢堂で教科書として使う目的もあってか、書籍の重複（特にWebsterの数種類の英語辞典の重複）が多く、総数は779冊に及ぶ。この目録を精査すると、Waylandの*The Elements of Political Economy*（1冊）の書名も確認できる。しかしながら、福澤から書籍を受け取った仙台藩は、戊辰戦争の混乱の中であったから、洋書どころではなく、藩校・養賢堂に納められたこれらの書籍は、その後、散逸する。したがって、この書によって、養賢堂関係者が、スミスと『国富論』のことを知り得た可能性は、多分に限りなくゼロに近いであろうと思われる。

11. 余滴：我が国最初の『国富論』翻訳、人間関係あれこれ

『国富論』の翻訳は、明治15（1882）年4月、田口卯吉が主宰する東京経済学講習会が発行した『東京経済学講習会講義録』第1巻に掲載された『富国論』（尺振八閔、石川暎作訳）に始まる（石川

は、東京経済学講習会の出版委員であった)。この『講義録』は、翌明治16年12月の第21巻をもって打ち切りになり、いくつかの著作の翻訳を併載する形式は取りやめられ、以後、4つの著作に分けての分冊形式で発行されることになる(大河内(1993)、松野尾(1996) pp.88-91)。『富国論』全12冊は、明治21(1888)年4月に完結する。明治17(1884)年6月、第4冊までをまとめて、「尺振八閔、石川暎作訳」として『富国論』第1巻(第1篇を収録)が発行され、続いて翌年5月、第5冊～第8冊が「石川暎作訳」として『富国論』第2巻(第2篇～第4篇第7章を収録)が発行されている(三邊(1943)、大河内(1993)、松野尾(1996) pp.91-92)。明治19(1886)年4月に、肺結核により、石川暎作が死去したことから(享年29歳)、第9冊～第12冊をまとめた『富国論』第3巻は、「石川暎作、嵯峨正作分訳」として、明治21(1888)年4月に発行された。

田口卯吉は、慶應3(1867)年、13歳の時、姉・錠子の嫁ぎ先の木村家(田口の姉の夫は、木村熊二)に寄寓するが、その隣家が、開成所教授手伝並の乙骨太郎乙(おつこつたろうおつ)宅だったことから、以後、乙骨の世話を受ける(杉原・岡田編(1995)、pp.587-589及び松野尾(1996)、pp.14-20)。維新後、乙骨は、沼津兵学校の二等教授方として沼津に就くが、田口も、静岡藩に復仕し、沼津に召される。明治3(1870)年には、沼津兵学校資業生となっている。従って、先に紹介した渡辺一郎編纂の『経済説略』を読んだ可能性は極めて高い。田口は、慶應3年に尺振八(せきしんぱち)に初めて会ったとされており、沼津から上京した後、その縁で尺振八の共立学舎で学び、明治5(1872)年には大蔵省翻訳局上等生徒になっている。この時の翻訳局の頭取は尺振八、教頭は乙骨太郎乙であった。田口は、ここで本格的に経済学と歴史学を学ぶことになる。

石川暎作は、安政5(1858)年4月20日、現在の福島県西会津町野沢の生まれである(地元の栄川酒造から、これをPRする大吟醸「富国論」が醸造販売されている)。田口卯吉の3歳下になる。慶應義塾で学んだ後、共立学舎移り、尺振八から英書を学んでいる。大蔵省翻訳局等にも勤務したが、病にかかり退職し、東京経済学講習会の幹事(出版委員)となり、『富国論』の翻訳に従事した。尺振八の下で学んだことが、経済学を専攻する決め手になったとされている(三邊(1943))。

このように、『富国論』を翻訳した石川暎作と「富国論叙」を寄せた田口卯吉とは、ともに、尺振八の教え子だったのである。まさに、田口卯吉の「叙」の「我友石川暎作譯此書而我師尺生校之也」である。ところで、尺振八とは何者なのか。高橋(2018)によれば、以下の通りである(pp.342-344を参照のこと)。尺は、万延元(1860)年にジョン万次郎から英語の手ほどきを受けた後、通弁御用出仕となり、アメリカ公使館詰となっている。文久3(1863)年には、益田孝や矢野二郎とともに、第2回遣欧使節団(横浜鎖港談判使節団)の通訳としてヨーロッパに行く。帰国後、アメリカ公使館からの要請により(この要請書の翻訳は、外国奉行所にいた福澤諭吉が担当)、公使館通訳となる。慶應3年には、軍艦受取委員として、福澤諭吉や津田仙らとともに、通訳として渡米し、帰国後も、尺と福澤は親しい交際を続けている。また、尺は、新島襄とも親密であった。密航して渡米した新島からの手紙は、密航が露見することを恐れ、横浜のオランダ改革派宣教師バラからアメリカ公使館の尺の手を経て、津田に預けられ、津田から新島の父・

民治のもとに届けられたのである。

尺と乙骨が、大蔵省翻訳局で同僚だったことは、先述の通りである。その頃、ふたりの家は、200～300メートルの距離のところにあった（尺（1989））。ふたりは、高橋（2018）で紹介された種々のエピソードからすれば幕末の頃から懇意であったから、田口が尺と出会ったのも、乙骨が縁かもしれない。その尺振八も、『富国論』の翻訳者、石川暎作が死去した明治19（1886）年の11月28日に、石川と同じ病気、肺結核により死去する（天保10（1839）年生まれなので、享年48歳であった）。彼の葬儀には、福澤諭吉、津田仙、田辺太一、田口卯吉、島田三郎、外山正一、乙骨太郎乙らが参列した（尺（1989））。最後に、この節を終わるにあたり、尺振八が明治19（1886）年発行の『明治英和字典』（Websterの*National Pictorial Dictionary*）の訳者として知られていることを付記しておく（『明治英和字典』は、本文1155ページに及ぶ大冊である）。

12. 『国富論』 フランス語版

Carpenter（1976）は、スミス思想のヨーロッパ大陸への伝播の影響を取り扱った最初の書、すなわち、パリイ（Melchior Palyi）の*The Introduction of Adam Smith on the Continent* に依拠して、スミスの影響がはっきりと現れるまでに、フランスでさえも時間がかかったとする。その根拠として、Carpenter（1976）は、1800年末までに刊行された11種のフランス語版（第7表の11番までの書）を紹介している。

第7表の書誌情報は、Carpenter（1976）、ゴールドスミス・クレス文庫の各版（オンライン版）、三邊（1943）及び東北学院大学図書館所蔵のアダム・スミス・コレクション（『国富論』フランス語版）により、整理したものである。これについて、まず簡単に説明する。

『国富論』フランス語版の書名は、いずれも、*Recherches sur la nature et les causes de la richesse des nations* である。1番目の書の翻訳者が不詳（Carpenter（1976）の言うunknown）は、翻訳者名が「M***」と印刷されていることによる。2番目のものは、1779年1月から1780年12月まで、*Journal d'agriculture, commerce, finances et arts* に掲載されたフランス語訳である。翻訳者は、三邊（1943）やCarpenter（1976）では、ブラヴェ（J.L. Blavet）とされている。3番目（1781年版）と5番目（1788年版）は、*Journal* に掲載された翻訳を単行本として刊行したものである。3～5番目について、ゴールドスミス・クレス文庫オンライン版で見ると、翻訳者名の記載はないが、Carpenter（1976）では、いずれも、「J.L. Blavet」とされている。このオンライン版の書誌情報では、1788年版のみが、Jean-Louis Blavert となっている。11番目（1880-1881年版）の翻訳者も、Blavert であるが、「Le Citoyen（市民）Blavert」と表記されている。6番目（1790-1791年版）から9番目（1794年版）の翻訳者は、J.A. ルーシェ（Jean-Antonie Roucher）である（ただし、8番目までの翻訳者名は M. Roucher と表記・印刷されている）。ルーシェは、フランス革命において断頭台の露と消えた薄命の詩人であった（三邊（1943））。

東北学院大学図書館では、8番目（1792年版）を2セット所蔵し、6・9・11番目を各1セット所蔵している。なお、2番目と10番目の翻訳については、ゴールドスミス・クレス文庫オンライン

版では、検索抽出できなかつたことを付言しておく。

Carpenter (1976) は、スミスのフランスへの影響が徐々に浸透した根拠として、上の11種類のフランス語版を挙げているが、しかしながら、このうち実際にフランス国内で刊行された「単行本」は、6冊にとどまる。1番目(1778-1779年版)はオランダのハーグ(La Haye, ラ・エ)で、3番目(1781年版)はスイスのイヴェルドン(Yverdon)で、8番目(1782年版)はスイスのヌーシャテル(Neuchatel)で、10番目(1797年版)はベルン(Bern)で刊行され、また、2番目のものは、Journalに掲載された翻訳であり、単行本ではなかつたのである。このような点を考慮に入れると、スミスのフランス国内への影響は、Carpenter (1976)の説明よりも、さらに緩慢だったことになる。

第7表の12番目(1802年版)から16番目(1859年版)までは、ゴールドスミス・クレス文庫と東北学院大学図書館所蔵アダム・スミス・コレクションとの比較である。出版地はパリになり、翻訳者も、13番目(1806年版)のルーシェを除き、ジェルメン・ガルニエ(Germain Garnier)になる。なお、14番目(1822年版)の翻訳者名は、「Marquis (侯爵) Garnier」である。

12番目(1802年版)には、ガニエルの長い序文が付けられ、この序文の中で、スミスとフランス経済学者の学説比較、スミスの研究方法の紹介、フランスとイギリスの富の比較が行われている。さらに、スミスの生涯の紹介も行われ、第5巻は、全巻が訳者注と索引となっている。スミスの生涯の紹介、スミスの研究方法とフランス経済学者の学説比較等は、逆にフランス語から英語に翻訳され、イギリスでいくつかの版(例えば、1806年版、1809年版、1811年版)に収められたのである。第8節で紹介したように、イギリスでは、『国富論』の差別化による独占的競争の時代に入っていたから、ガニエルの長い序文は、独占的競争の時代のひとつの方向性を示すものであった。

ところで、三邊(1943)では、この『国富論』1802年フランス語版においてタッシーのスミス肖像が初めて掲げられ、英語版に転載されたとしているが、東北学院大学図書館所蔵の1802年フランス語版を確認すると、フランスの著名な彫刻師「B.L. Prevost sculp.」によるスミス肖像であった。このスミス肖像は、「左向き」の精密・精巧な肖像であり、1797年の『哲学論文集』フランス語版に掲載されたものと同一であった。後には1822年の『国富論』フランス語版(第7表の14番目)にも採録されたスミス肖像であった。これに対して、最初にスミス肖像が掲げられた英語版は、第8節で紹介したように、タッシーのメダリオンをもとにした1805年のグラスゴー版 new editionであった。このふたつの肖像を比較すると、顔の印象(特に目・鼻立ち・口元)とウィッグの形が大きく異なっており、フランス語版1802年版のスミス肖像は、タッシーのメダリオンから彫刻したようには見えない。

13. 『国富論』ドイツ語・デンマーク語・スウェーデン語版

東北学院大学図書館所蔵アダム・スミス・コレクションの『国富論』を終えるにあたり、ドイツ語版、デンマーク語版、スウェーデン語版について紹介する。

第7表 『国富論』 フランス語版

	出版年	翻訳者	出版地	巻数	Carpenter (1976)	ゴールドス ミス・クレ ス文庫	東北学院大 学図書館
1	1778-1779	(不詳)	La Haye	4v	○	○	
2	1779-1780	(Jean-Louis Blavert)			○		
3	1781	(Jean-Louis Blavert)	Yverdon	6v	○	○	
4	1786	(Jean-Louis Blavert)	Paris	6v	○	○	
5	1788	(Jean-Louis Blavert)	Paris	2v	○	○	
6	1790-1791	M. Roucher	Paris	4v	○	○	○
7	1791-1792	M. Roucher	Avignon	4v	○	○	
8	1792	M. Roucher	Neuchatel	5v	○	○	○
9	1794	J.A. Roucher	Paris	5v	○	○	○
10	1797	(不明)	Bern	5v	○		
11	1880-1801	Le Citoyen Blavert	Paris	4v	○	○	○
12	1802	Germain Garnier	Paris	5v		○	○
13	1806	J.A. Roucher	Paris	5v		○	
14	1822	Marquis Garnier	Paris	6v		○	
15	1843	Germain Garnier	Paris	2v		○	○
16	1859	Germain Garnier	Paris	3v			○

(注) 掲載や所蔵のフランス語版に、○印を付けている。

『国富論』ドイツ語版に関して、本学では、第5節で紹介した1776年のドイツ語版初版のほか、1796年-1799年のクリスチャン・ガルヴェ (Christian Garve) 訳と1861年にC.W.アシア (Carl Wilhelm Asher) 訳を所蔵している。

ドイツ語版初版 *Untersuchung der Natur und Ursachen von Nationalreichthümern* は、翻訳の質の問題等もあり、ドイツの経済学会にほとんど影響を与えなかったが、C.ガルヴェ訳の質が良かったことや、フランス革命の影響もあって、ゲッチンゲンやケーニヒスベルク (バイエルン) の大学を中心にスミスの考え方が広まっていたのである (Hagemann (2017))。特にゲッチンゲンは、ドイツからイギリス王室を継承したジョージ一世の領地であったことから、ゲッチンゲン大学は、イギリスの影響を受けるとともに、イギリス王子も含め、多くのイギリス人留学生も受け入れていたのである (Hagemann (2017))。『孤立国』の著者、J.H.フォン・チューネン (J.H. von Thünen) も、この時、スミスの影響を受けたひとりであった。

最初、この新訳は、1794-1796年にポーランドのBreslau (ドイツ語読みブレスラウ、ポーランドのヴロツワフ) において、4巻本として刊行されたが (三邊 (1943)、本学所蔵のドイツ語訳は、1796年-1799年にフランクフルトとライプツィヒで刊行されたガルヴェ訳の4巻本 (ガルヴェ訳初版二刷) である。

1861年のC.W.アジア訳は、*Über die Quellen des Volkswohlstandes* の書名で、シュタウトガルトで刊行された2巻本である。

19世紀の定評のある『国富論』ドイツ語訳は、1846-47年のマックス・スティルナー (Max Stirner) 訳とされている。先に紹介した『シーボルト将来本目録』の『国富論』も、スティルナー訳と思われるが、残念ながら、本学ではこの版を所蔵していない。

デンマーク語版は、日本国内では、本学と慶應義塾大学のみが所蔵している (ゴールドスミス・クレス文庫のオンライン版 *The Making of the Modern World* でも検索閲覧可能である)。デンマーク語版 *Undersogelse om National-Velstands Natur og Aarsag* は、1779年にコペンハーゲンでフランツ・ドレビイ (Franz Draebye) 訳により第1巻が刊行され、翌年に第2巻が刊行された。オランダのハーグでのフランス語版刊行よりも1年遅れの刊行であった。ドレビイは、1740年のコペンハーゲン生まれである。コペンハーゲンのノルウェー通商局書記等を経て、1776年にイギリスに渡り、そこで『国富論』の刊行を知り、翻訳を志したのである (三邊 (1943))。

『国富論』スウェーデン語版は、日本国内では、本学図書館のみが所蔵し、ゴールドスミス・クレス文庫にも収蔵されていない「稀少書」である。1797年から1801年まで、ゲオルク・アデルスベルレ (Georg Adellersparre) によって、ストックホルムにおいて、哲学、経済学、文学をテーマとし、アダム・スミスの経済学とカントの哲学を研究の中心にすえた雑誌 *Läsning i Blandade Ämnen* が発行された。この雑誌に『国富論』スウェーデン語の抜粋訳が掲載されたのである。本学図書館は、1797年から1801年までの *Läsning i Blandade Ämnen* (第1巻～第5巻) を所蔵している。Carpenter (1976) が、1799年のこの雑誌に抜粋訳が掲載された旨と述べているので、本学図書館蔵を確認すると、確かに、第3巻 (1799年) のNo.23・24のpp.89-152, No.25・26のpp.43-114, No.27・28のpp.57-62とpp.93-120, No.29・30のpp.137-145, 及び第4巻 (1780年) のNo.36～38のpp.145-177に抜粋訳が掲載されている。

14. 『道徳感情論』

14.1 『道徳感情論』初版～第6版等の所蔵状況

アダム・スミスは、1751年、グラスゴー大学論理学教授に就任し、さらに翌年、道徳哲学教授に転ずる。『道徳感情論』初版は、『国富論』に先立つこと17年前の1759年に刊行され、スミスの生前には、『道徳感情論』第6版 (1790年) までが刊行された。内容的には、第2版 (1761年) と第6版において、大幅な改定・増補が行われている

第6節で紹介したように『国富論』は、第3版が大幅に改定されていることから、書誌的には、

『道徳感情論』初版 (1759年) ⇒ 『道徳感情論』第2版 (1761年) ⇒ 『国富論』初版 (1776年)
⇒ 『国富論』第3版 (1784年) ⇒ 『道徳感情論』第6版 (1790年)

という流れが、スミスの道徳哲学と経済思想の展開過程になる。

この両者の相互の作用を伴う展開過程の研究は、アダム・スミスを専門とする研究者に委ねることとし、この節では、第2節にならって、日本国内の『道徳感情論』初版～第6版等の所蔵状況

を把握することにしよう。

第8表は、第2表とまったく同一の手法を用いて検索抽出した結果を整理したものである。第8表に明示した大学名は、『国富論』との比較のために、第2表と同じ大学名を記載している。ただし、第8表の上部の「その他の大学」には、小樽商科大学、筑波大学、和歌山大学、長崎大学、札幌学院大学、立教大学、学習院大学、拓殖大学、千葉商科大学、同志社大学、関西大学、関西学院大学の12大学が該当し、第8表の下部の「その他の大学」には、早稲田大学、青山学院大学、法政大学、大阪市立大学術総合センター（福田文庫）の4大学が該当する。

日本国内の『道德感情論』初版の所蔵数は、19大学・24冊であり、『道德感情論』初版～第6版（ダブリン版を除く）の合計数は、32大学・79冊である。第2表の『国富論』の所蔵数（初版36大学・49冊、初版～第6版（ダブリン版・ドイツ語版を除く）44大学・155冊）と比較すると、冊数ではほぼ半分（両者の初版の比較では、大学数もほぼ半分）である。

『国富論』初版～第6版とは異なり、『道德感情論』初版～第6版を所蔵する大学は、皆無である。また、神戸大学のように、『国富論』初版～第5版を所蔵する大学でも、『道德感情論』の所蔵は

第8表 「道德感情論」 国内大学の所蔵状況

	大学名	初版 1759年	第2版 1761年	第3版 1767年	第4版 1774年	第5版 1781年	第6版 1790年	ダブリン版 1777年	合計
国立情報学 研究所 (NII) 検索	東京大学	1					2		3
	一橋大学	2	1	1		1	1		6
	千葉大学	1							1
	名古屋大学	2	2	1		1	1		7
	京都大学	2		1			1		4
	大阪大学	1	1		1		1	1	5
	神戸大学								0
	九州大学				1		1		2
	成城大学	1					1	1	3
	福山大学	1		1	1	1	1		5
その他の大学	4	1	3		2	4		14	
国立情報学 研究所 (NII) 検索外	慶應義塾大学	3	1	1	1	1			7
	中央大学			1	1	1			3
	専修大学		1						1
	東京経済大学	1	1					1	3
	明星大学	1	1	1			1		4
	大阪商業大学	1	1	1	1				4
	東北学院大学	1	1	1	1	1		1	6
	その他の大学	2	1	1		1		1	6
合計	24	12	13	7	9	14	5	84	

皆無である（神戸大学附属図書館のOPAC検索では、1793年のパーゼル版『道徳感情論』が最も古いバージョンである）。

アダム・スミスは「近代経済学の父」と呼ばれることから、日本の大学の中では、経済学系学部を中心に『国富論』の収集に熱心であったが、道徳哲学の書『道徳感情論』に対しては、経済学系以外の分野での関心も薄かったのである。まさに、『道徳感情論』は、「『国富論』に捧げられる栄誉の前に光を失ひ、今日では専門家以外に殆んど聞えるところがない。恐らく一には倫理学の研究が前世紀に於いて別の方向に進み、本書で試みられるやうな経験的・心理的取扱いが流行らなくなった」ことによるものであろう（三邊（1940））。

14.2 東北学院大学図書館所蔵の『道徳感情論』初版

『道徳感情論』初版は、1759年に、8つ折り版（21cm×13cm）の1巻本（ページ総数551ページ、最後のページに正誤表（ERRATA））として、ロンドンのA. ミラー（Andrew Millar）によって刊行された。より正確には、

Printed for A. MILLAR, in the STRAND;

And A. KINCAID and J. BELL, in EDINBURGH.

である。ミラーは、スコットランド出身の出版者で、デイビット・ヒューム等のスコットランドの学者の出版も引き受けていたが、エジンバラの出版販売は、上のようにキンケードとベルによって行われていたのである。価格は、1部6シリングであった（三邊（1940））。

本学所蔵の『道徳感情論』初版には、Edinburgh University, Philosophy Library の蔵書印が押されている。University of Edinburgh のPsychology and Philosophy Libraryの『道徳感情論』初版の書誌情報には、「Pp.317-336 omitted; text and register are continuous.」の注記が付いている。本学所蔵版も、同様に、ページ番号317-336がなく、316ページから337ページに飛ぶが、テキストは連続している。

University of EdinburghのHPには、スコットランドの哲学者ヒュームが1722-1726年にエジンバラ大学の学生であったことや、スミスも、1748-1751年にエジンバラ大学でpublic lecturesを行ったことがアップされている。スミスのpublic lecturesは、文学をめぐる一連の公開講義のことのようであるが⁷⁾、スミスは、この講義が機縁となって、1751年1月、グラスゴー大学教授に迎えられたのである（丸山（2011）、p.18）。

『道徳感情論』初版の蔵書印「Edinburgh University, Philosophy Library」は、時間と空間を超えたスミスとの不思議な縁を強く感じさせる。

14.3 東北学院大学図書館所蔵の『道徳感情論』第2版～第5版ほか

1761年の『道徳感情論』第2版では、第3部の大幅な改訂・増補が行われているが、出版者や本のサイズ等は、初版と同一である（ただし、ミスプリントは修正されている）。また、1ページの

7) 三邊（1940）では、1748-1749年が文学講義、1750-1751年が法学講義とされている。

印刷行数が、28行から33行へ5行ほど増えたことにより、ページ総数は、446ページとなり、初版より100ページほど少なくなっている。

1767年の『道徳感情論』第3版も、出版者や本のサイズ(8つ折)等は、初版や第2版と同一であるが、販売については、ロンドンのA. ミラー、エジンバラのキンケードとベルのほか、ロンドンのT.カデルにも認めている。すなわち、「And sold by T.CADELL in the STRAND」である。本文(pp.1-436)も、第2版と同一であるが、最終行は、「FINIS」から「THE END」に変更されている。437ページから478ページまで、*Considerations Concerning the First Formation of Languages and the Different Genius of Original Compounded Languages*と題する、40ページ以上にもわたる「言語形成に関する考察(言語起源論)」が付けられている。『道徳感情論』と直接に関連しない「考察」は、先に紹介したエジンバラ大学での文学の公開講義における文体分析の序文と推測もなされているが、ここに添付された理由は不明である(三邊(1940))。

1774年の『道徳感情論』第4版には、著書の内容を説明する長いサブ・タイトル*An Essay towards an Analysis of the Principles by which Men naturally judge concerning the Conduct and Character, first of their Neighbours, and afterwards of themselves*が付けられ、さらに、第3版の「言語形成に関する考察」も、*A Dissertation on the Origin of Languages*と簡潔な題に変更されて採録されている。1776年の『国富論』初版の出版者は、W.ストラーンとT.カデルであったが、彼らは、『道徳感情論』第4版から出版者としてスミスの出版に関わる。また、エジンバラも、W.クリークに代わる。すなわち、

Printed for W. STRAHAN, J. and F. RIVINGTON,
T. LONGMAN; and T. CADELL in the STRAND;
and W. CREECH at Edinburgh.

である。なお、『道徳感情論』第4版を*The Making of the Modern World*で検索を実行すると、検索件数は0であり、ゴールドスミス・クレス文庫に所蔵されていないことが判明する。

1781年の『道徳感情論』第5版は、第4版とほぼ同一である。巻末には、「BOOKS printed for T. CADELL in the Strand」が付けられ、15冊の書籍の簡単な紹介(広告)が行われている。

本学は、『道徳感情論』初版～第6版の中で、スミスが逝去した1790年の『道徳感情論』第6版は所蔵していないが、ダブリン版を所蔵している。ダブリン版は、1777年刊行にも関わらず、「第6版」と印刷され、J.ベージェとT.ジャクソンが出版者となっている。ロンドン版第6版から2巻本になっているが、ダブリン版は1巻本のままである。いくぶん1ページの行数が多いこと、やや活字のポイントも小さいこと、挿絵が削除されていることを除くと、正規版第4版とほぼ同一である(このため、総ページ数は、第4版より50ページほど少ない)。

14.4 東北学院大学図書館所蔵の『道徳感情論』第7版～第10版

ゴールドスミス・クレス文庫に収められた第6版を参照すると、第6版は、外形的には2巻本と

なり、ページ数が増えている。第1巻は、第4部まで（本文488ページ）、第2巻は、第5部から第7部で構成され、「言語形成に関する考察（言語起源論）」も付けられている（最終ページは462ページ）。内容的には、「新」第6部が追加され、従来の6部構成から7部構成となっている（第6部の考察については、井上（2003）を参照のこと）。また、第1部第3編第3章が新しいものに差し替えられ、第3部は、第2版でも大幅な改訂・増補が行われたが、第6版では、第2章と第3章が新しく追加され、従来の4章構成から6章構成になっている。なお、出版者は、第6版からロンドンのF.リビングトンとT.ロングマンが出版者から抜ける。エジンバラでは、第4版から出版を担ったW.クリークとともに、初版～第3版のJ.ベルが、ベル社（J. Bell & Co.）として、再び出版に携わることになる。すなわち、

Printed for A. STRAHAN; and T. CADELL in the Strand;
and W. CREECH, and J. BELL & Co., at Edinburgh.

となっている。

スミス逝去後に出版された1792年の『道徳感情論』第7版と1797年の第8版は、第6版とまったく同一である。ただし、第8版の出版に、『国富論』第8版と同様に、T. CADELL の後継者として、カデル・ジュニアとW.デイビスが加わる、すなわち、T. CADELL jun. and W. DAVIES (Successor to Mr. CADELL) であるが、エジンバラでの出版は、従前のまま変更はない。

1801年の第9版の内容は、当然のことながら第6版と同一であるが、小さめも活字で印刷され、ページ数がいくぶん少ない。1804年の第10版は、さらに活字も小さくなり、ページ数も少なくなっている。

『道徳感情論』第9版の出版から、1802年の『国富論』第10版と同様に（第6表を参照のこと）、A. ストラーンが外れて、印刷のみを担当し、ロンドンでは、カデルとデイビスが、また、エジンバラでは、クリークとベル社が出版の責任を担うことになったのである。すなわち、この第9版の中表紙には

Printed by A. Strahan, Printers-Street, London

For T. CADELL jun. and W. DAVIES in the Strand; and
W. CREECH, and J. BELL & Co., at Edinburgh.

と印刷され、また、第1巻と第2巻の最終ページのフッターにも、「*Printed by A. Strahan, Printers-Street, London*」の1行が印刷されている。

1804年の第10版の冒頭では、出版者とは別ページのフッターに「Strahan and Preston, Printers-Street」として印刷者名が移され、第1巻と第2巻の最終ページのフッターにも、これが印刷されている。また、エジンバラでの出版販売も、クリークは引き続き出版を担うものの、ベル社（Bell & Co.）は、ベルとブラッドヒュート（Bell and Bradfute）に変わっている。

14.5 東北学院大学図書館所蔵の『道徳感情論』第11版以降

第8節で述べたように、スミスが1790年7月17日に逝去した。アン女王法により著作権も、逝去

後14年間保護されたが、1804年に『国富論』『道徳感情論』の著作権が切れる。

The Making of the Modern World (ゴールドスミス・クレス文庫) の検索では、1793年にスイスのパーゼルで、J.J. Tourneisenによって出版販売された『道徳感情論』のみが抽出される。これ以外は検索されないことから、少なくとも、グレートブリテン王国(イングランド王国とスコットランド王国)においては、『道徳感情論』の著作権は保護されていたと考えてよい。

『道徳感情論』の著作権が切れとともに、1808年に第11版がエジンバラで、翌年には第12版がグラスゴーで、1812年に第11版がロンドンで、さらに1813年にはエジンバラでも別バージョンが刊行される⁸⁾。

1808年のエジンバラ第11版は、これまでエジンバラでの出版販売を担当していたベルとブラッドヒュートが中心となって刊行された。彼らのほかにも、エジンバラとロンドンの十数名が出版のリスクを負ってエジンバラ第11版を刊行したのであった。なお、印刷所は、エジンバラのマンデル他(Printed by Mundell, Doig, and Stevenson, Edinburgh)であった。

1809年のグラスゴー第12版の出版者は、グラスゴーのR. チャプマン(R. Chapman)であったが、グラスゴーの15名(15社)、エジンバラの3名(3社)、ロンドンの数社が販売リスクを分担した。1巻本の形で刊行され、冒頭には「スミス肖像」が印刷され、本文の前に28ページに及ぶ小伝「著者の生涯(Life of the Author)」が付けられている。R. チャプマンは、1805年の『国富論』グラスゴー版の「new edition」の出版者だったが、これに「スミス肖像」が印刷されていたことは、前述の通りである。ふたつの肖像には、ともに、微小な字で“from Tassie Medallion”のキャプチャーが付けられているにもかかわらず、両者を比較すると、別人の印象を受ける。また、この1805年には同じグラスゴーにおいて、小伝「著者の生涯(Life of the Author)」が付いた「Glasgow: at the University press」の『国富論』の「new edition」が発行されていた。つまり、1809年の『道徳感情論』グラスゴー第12版には、グラスゴーで4年前に競合出版した『国富論』の「著者の生涯」がそのまま転載されていたのである。著作権が切れにともなう二次的著作物の再利用であった。

1812年のロンドン第11版も、1巻本で刊行された。出版者は、1804年の第10版の顔ぶれに戻るとともに、第4版と第5版の出版者だったF.リビングトンとT.ロングマンの関係者も加わる。すなわち、

PRINTED FOR CADELL AND DAVIES; F.C. & J. RIVINGTON;
AND LONGMA, HURST, REES, ORME, & BROWN;
AND W. CREECH; AND BELL & BRADFUTE.
AT EDINBURGH

である。この表紙の前のページや第1巻と第2巻の最終ページのフッターにも、「Strahan and Preston, Printers-Street」と印刷されており、ストラーンも印刷を担当していたことが判明する。このことは、『道徳感情論』の著作権が切れ、早い者勝ちの版元違いの新規参入者たちによって第11版(1808年エジンバラ版)や第12版(1809年グラスゴー版)が出版されたことに対抗して、

8) 1809年グラスゴー第12版と1813年エジンバラ版については、ゴールドスミス・クレス文庫を参照し、この節で紹介した。

『道徳感情論』第10版までの出版印刷を担った者たちが結集し、『道徳感情論』出版の「正当な」継承を世間にアピールしているように思われる。

実は、1811年から『アダム・スミス著作集』第3～5巻の刊行が始まり、『道徳感情論』は、1年遅れのシリーズの第1巻として1812年に刊行されたのである。しかも、1812年の『道徳感情論』ロンドン第11版と『アダム・スミス著作集』第1巻の『道徳感情論』は、内容本文がまったく同一の書物であった。

実際、この両者の内容本文は、1ページから最終ページの前まで、行数もページ付けも変わらず、まったくの同文が印刷されている。ただし、表紙、中表紙、目次の体裁、最終ページ及び出版者名が異なっている。とりわけ、『アダム・スミス著作集』第1巻の中表紙には、メダリオンからの「スミス肖像」が印刷されているが、ロンドン第11版にはない。最終ページの最後は、「END OF THE FIRST VOLUME」に対して、当然のことながら、「THE END」となっている（最終ページのフッターには、ともに、印刷者名が印刷されている）。

また、ロンドン第11版には、上で紹介したように第11版の出版に直接に関係した者の名前が印刷されているのに対して、『アダム・スミス著作集』第1巻には第1～5巻の出版に関係した全員の名前が印刷されているのである。つまり、スミスの著作権が切れ、新規参入者が登場したことに対して、『アダム・スミス著作集』を刊行することにより、アダム・スミス出版の正統と継承を顕示するとともに、「見えざる」参入障壁を設定しようとしたのである。『アダム・スミス著作集』刊行は、出版競争の終結宣言であった。このことが、すでに、第11版（エジンバラ版）や第12版（グラスゴー版）が出版されているのもかわらず、『国富論』第11版に合わせて、あえて第11版（1812年）として出版した理由であろうと思われる。なお、この『道徳感情論』ロンドン第11版は、『アダム・スミス著作集』第1巻と事実上の重複しているためか、国内での所蔵は、本学と福岡大学の2大学に過ぎない。

上で述べた経緯から『道徳感情論』で番号が付けられた「版 (edition)」は、ここまでである。これは、『アダム・スミス著作集』第1巻による事実上の終結宣言であった。しかも、1813年にはエジンバラでも（本学では所蔵していない）別バージョンが刊行されるが、人気のある『国富論』と異なり、また、質の良い二次的著作物もまったく刊行されなかったことから、この後のイギリスでの『道徳感情論』の刊行は、1822年になる（*The Making of the Modern World*の検索による）。

ところが、アメリカでは、1817年のフィラデルフィア版とボストン版が、また、1822年のニューヨーク版が発行される。このうち、本学は1817年のフィラデルフィア版を2セット所蔵している。この表紙には、「エジンバラ第12版からの最初のアメ리카版」と印刷されているが、上で見たように、エジンバラ版は第11版であり、第12版はグラスゴー版である。フィラデルフィア版には、スミスの肖像と「著者の生涯」が付いていないことからすれば、「エジンバラ第11版」を底本としてように思われる。ゴールドスミス・クレス文庫を閲覧すると、ボストン版には、「最新の英語版から」と印刷されているので、素直に考えれば、1812年の第11版、あるいは同じことだが『アダム・スミス著作集』第1巻を基にしているように思われる。ちなみに1822年のニューヨーク版

にはこの種の印刷はない。

このほか、1850年までの『道徳感情論』の*The Making of the Modern World*検索では、1843年のインドのカルカッタ版のみが抽出される。こうしたことから、19世紀前半のイギリスでの『道徳感情論』の出版は、1822年が最後と見てよいであろう（英語版に広げても、1822年のニューヨーク版、1843年のカルカッタ版が19世紀前半の最後の発行になる）。『道徳感情論』では、『国富論』に付随した2次的著作物の競争が起こらなかったことから、読者層が広がらず、出版部数が限定されたのである。

この節を終わるにあたり、1817年のフィラデルフィア版（日本国内では、本学が2セット所蔵するほか、慶應義塾大学のみ所蔵）以降に発行された本学所蔵の『道徳感情論』4冊について簡単に紹介する。

1830年にパリで発行されたフランス語版は、日本国内では、本学と慶應義塾大学のみが所蔵している（慶應義塾大学は1798年フランス語版も所蔵している）。イギリスに戻ると、本学は、1853年のロンドン版、1854年のロンドン・グラスゴー版、1880年のロンドン版を所蔵している。1854年のロンドン・グラスゴー版は、国内では、本学と東京大学のみが所蔵し、1880年のロンドン版は、本学と慶應義塾大学のみが所蔵している。なお、ロンドン・グラスゴー版は、Richard Griffin and Companyによるグラスゴー大学のための出版であった。本学所蔵版には、マンチェスターの「HARTLEY VICTORIA COLLEGE LIBRARY」の蔵書印がある。このハートレイ・ヴィクトリア・カレッジは、1811年に創立されたメソジスト派の神学校であったが、現在は閉校となっている。

15. ヒュームの生涯』、『哲学論文集』及び『アダム・スミス著作集』

15.1 『ヒュームの生涯』

1776年、アダム・スミスの『国富論』初版がW.ストラーンとT.カデルによって出版された。この1776年4月18日、スミスの敬愛する友人、D. ヒュームは、*My Own Life*（『自叙伝』）を書き上げ、同年8月25日に逝去した。同年11月9日、スミスは、ヒューム評や彼についての想いを綴り、下院議員でもあったW.ストラーン宛に手紙を書く。ストラーンは、1777年の3月か4月に、ヒュームの『自叙伝』と「スミスからの手紙（*Letter from Adam Smith, LL.D. to William Strahan, Esq.*）」を合本し、カデルも加わり、*The Life of David Hume, Esq.*（『ヒュームの生涯』、別名は『デイビッド・ヒューム伝』）を3,000部出版する（林（2010））。本のサイズは、11cm×16cmと小さく、総ページ数も62ページに過ぎない（pp.1-35がヒュームの『自叙伝』、pp.39-62が「スミスからの手紙」である）。このため、価格も1シリング6ペンスと安かった。

スミスのヒューム評は、「ヒュームを不信論者、無神論者の象徴的存在と見なすイギリス国教会保守層の敵愾心をかき立て」、「国教会牧師ホーンがスミス批判の急先鋒として登場する」ことになる（林（2010））。ホーンは、1777年、「キリスト教徒と呼ばれる者のひとりとして」の名前で（すなわち、匿名で）、*A Letter to Adam Smith LL.D on the Life, Death, and Philosophy of*

His Friend David Hume, Esq. (『アダム・スミス博士への手紙』) を出版する (日本語訳は、林 (2010) を参照のこと)。この書は、非常に人気を博し、同年に第2版が出版される。

日本国内では、20程度の大学図書館が『ヒュームの生涯』初版を所蔵しているが、『アダム・スミス博士への手紙』は、1777の初版・第2版合わせても、10大学に満たない。本学も『ヒュームの生涯』のみを所蔵する。

15.2 「哲学論文集」

スミスが死を予感し、これまで書きためた草稿のすべてを焼却するように知人に依頼したが、その際、焼却を免れた草稿が、スミスの逝去の5年後の1795年に、*Essays on Philosophical Subjects* (『哲学論文集』) として刊行された。この書では、「天文学史」、「古代物理学史」、「形而上学史」等が論じられており、『道徳感情論』と『国富論』の形成・展開の根底を探求する上で有用とされている。

本学は、1795年のロンドン・エジンバラ版とダブリン版を所蔵する。J.ブラック (J. Black) とJ.ハットン (J. Hutton) が編集したことから、ふたりの序文と、1793年1月21日と3月18日のエジンバラでのD.スチュアート (D. Stewart) の講演録「スミスの生涯と著作」が付けられている。この講演録は、95ページに及び、『哲学論文集』本文の4割のページを占める。ロンドンでの出版者は、Tカデル・ジュニアとW.ディビス、すなわち、T. CADELL jun. and W. DAVIES (Successor to Mr. CADELL) であり、エジンバラでの販売は、W.クリークであった。『哲学論文集』の出版に関しては、これまで『道徳感情論』や『国富論』の出版者のひとりだったA. ストラーンの名前がない。

『哲学論文集』の採録されたスチュアートの講演録の最後の箇所では、タッシーのメダリオンについても触れられている。すなわち、“He never sat for his picture; but the medallion of TASSIE conveys an extra idea of his profile, and of general expression of his countenance.” である (cxivページ)。これまでに紹介してきたアダム・スミス肖像の源は、ここにあったのである。スミス肖像は、1797年の『哲学論文集』フランス語版、1802年の『国富論』フランス語版、1805年の『国富論』グラスゴー版、1811年の『アダム・スミス著作集』第1巻等に印刷され、さらに、イギリス20ポンド紙幣 (2007年3月から発行) にも印刷されることになる。

1795年のダブリン版は、1776年の『国富論』ダブリン版初版の出版者のMessrs等が出版したものである。内容は、ロンドン・エジンバラ版と同じものであるが、装幀はかなり見劣りするし、本のサイズも、22cm×27.5cmに対して、13.5cm×22cmと半分になっている。このため、1ページの行数や総ページ数が異なっている。

本学では、このほかに、1797年のフランス語版と1799年のスイス・バーゼル版の『哲学論文集』を所蔵している。フランス語版には、中表紙にスミスの肖像が印刷され、編集者の序文とスチュアートの講演録「スミスの生涯と著作」がフランス語に翻訳され採録されている。先述のように、この肖像は、『国富論』フランス語版 (1802年) とまったく同じ肖像 (B.L. Prevost sculp.) であ

る。このふたつのフランス語版の出版者は、パリのChez H. Agasseであったから、『哲学論文集』のスミスの肖像が『国富論』に再利用されたのである。

スイスのバーゼル版は、英語クラス用に印刷され、J.デッカー (J. Decker) が出版販売した書である。J.ブラックとJ.ハットンの序文は省かれ、すぐにスチュアートの講演録から始まっている。

15.3 『アダム・スミス著作集』

The Works of Adam Smith (『アダム・スミス著作集』) は、1811～1812年に発行されて5巻本のアダム・スミスの全集である。まず、1811年に第3・4巻の『国富論』Ⅱ・Ⅲと第5巻の『哲学論文集 (「言語起源論」と「スミスの生涯と著作」も所収)』が刊行され、翌年に第1巻の『道徳感情論』と第2巻『国富論』Ⅰが刊行された。経験上、スミスの書の売れ筋や売れ行きは予測できたから、「売れ筋を後に」の販売戦略をとり、収益を確保しようとしたと解すこともできよう。出版者は、同年の『道徳感情論』ロンドン第11版の出版者であったロンドンのカデルとディビス、リビングトン、ロングマンやエジンバラのグリークのほか、13名(社)であった。また、印刷は、ストラーンほか (Strahan and Preston, Printers-Street) であった。

第1巻の『道徳感情論』の表紙には、タッシーのメダリオンから描かれた肖像が印刷されていた。すなわち、

From a Medal by Tassie

Drawn by J. Jackson, Engraved by C. Picart

である。前述のように、1795年の『哲学論文集』においてスチュアートによってタッシーのメダリオンが紹介された後、イギリスでは、これを基にしたスミスの肖像が、1805年の『国富論』グラスゴー版に印刷され、1812年にも、『アダム・スミス著作集』第1巻に印刷されたのである(すでに述べたように、同時出版の『道徳感情論』ロンドン版第11版にはスミス肖像はない)。

ところで、本学所蔵の『アダム・スミス著作集』全巻に、「Kebel College library」の蔵書印が押してある(全巻に「withdrawn」の押印もあり、古書店への払い下げ品である)。キープル・カレッジは、オックスフォード大学を構成するカレッジのひとつであるが、同大学の中では比較的新しいカレッジ(1870年創立)である。オックスフォード大学の図書検索システムSOLOで検索すると、統括図書館(かつイギリスで発行された図書の指定納入機関のひとつ)のボドリアン図書館が『著作集』全巻1セットが所蔵されているのみである。オックスフォード大学では、ボドリアン図書館の統括の下に、原本を数冊を残し、重複するカレッジ図書館図書を払い下げ、オンライン・アクセスによるPDF閲覧を推奨する方針がとられているように思われるのである。

むすび

近年の『国富論』の書誌研究や文献的研究においては、貴重書の高額さによる予算制約とオリジナル版毀損回避の観点から、ファクシミリ版(模写版)やインターネット公開版(小樽商科大学附属図書館による『国富論』初版の公開、大阪市立大学学術総合センター(福田文庫)等

による『国富論』初版・第2版・増補版の公開、アメリカの学術インフラであるHATHI TRUST Digital Libraryによる貴重書・古典・著作権切れの一般書の公開)も、よく利用されているようである。

『国富論』ファクシミリ版は、『国富論』初版の刊行200年を記念して、1976年に発行されたものである。このファクシミリ版は、当時の雄松堂(現在の丸善雄松堂)によって1,000部が印刷され、981部が販売されたものである。「CiNii検索」をかけると、国内では80の大学図書館等が所蔵している。また、「CiNii検索外」では、慶應義塾大学、早稲田大学、東北学院大学等が所蔵している(ちなみに、本学のファクシミリ版の発行番号は89番である)。

さらに、15世紀から1850年までの社会科学系図書6万点以上を収録した世界最大の経済学史コレクションである「ゴールドスミス・クレス文庫(*The Goldsmiths' -Kress library of Economic Literature*)」のマイクロフィルム版に加え、オンライン(オンライン版の名称:*The Making of the Modern World*)でもアクセス可能となったことにより、社会科学系の文献研究に「ゴールドスミス・クレス文庫」を利用する大学も増加している。

本稿の執筆過程では、まず、本学所蔵のアダム・スミス・コレクションのすべてを実査した後、順次、『国富論』ファクシミリ版、ゴールドスミス・クレス文庫マイクロフィルム版、オンライン版を参照し、再度、アダム・スミス・コレクションを実査・確認する方法をとった。以後、コレクションとオンライン版を交互に参照する方法を繰り返した。『道徳感情論』等においても、この交互参照方法を用いた。オリジナル版の毀損を回避するために、また、ゴールドスミス・クレス文庫オンライン版の利便性が良く、研究室からアクセス可能なことから、実際上は、かなりの部分をオンライン版に頼った。現代の実務的な文献整理の作業においては、オンライン版が不可欠になっているのである。なお、『国富論』初版の精読には、ファクシミリ版が有効であった。

東北学院大学図書館所蔵の2冊の『国富論』初版の比較から、1976年のグラスゴー版『国富論』やTodd(1976)が指摘した校合との相違を発見し、第3表を作成するに至った。一橋大学社会科学古典資料センター所蔵や明星大学図書館所蔵を含め9セットの『国富論』初版の中で、未製本の本学所蔵の「原裝アンカット版」のみが両者の指摘と合致した。製本版においては、製本の優劣を反映して様々な差異が見られた。また、本学がタッシー制作のメダリオンを所蔵していることを端緒にして、スミス肖像の印刷の経緯や肖像採録の著書等を探求した。これらの問題提起や考証は、オンライン等の現代的媒体のみでは困難であった。本学所蔵アダム・スミス・コレクションを地道に探求することによって、新たな研究のひとつの方向を見出したのである。

遠藤(2001)は、「本コレクションには、各版の比較研究および編集者の人物研究などを通じて可能となる、新たな方向を示唆する重要な手がかりが存している。これほどととのった各版の原本は、フィルムやコピーでは決して得ることができない、スミスの偉大さと歴史の重みを十分に認識させ、新たなスミス研究への刺激を与えるであろう。」と述べているが、まさに、その通りであった。

基礎資料・参考文献

【基礎資料】

「アダム・スミス・コレクション」(東北学院大学図書館蔵)

「アダム・スミス関連旧蔵稀少図書」(東北学院大学図書館蔵)

「一橋大学社会科学古典資料センター 貴重書コレクション」(一橋大学社会科学古典資料センター蔵)

「明星大学 貴重書コレクション」(明星大学図書館蔵)

【国富論】初版 [インターネット公開版] (大阪市立大学学術総合センター福田文庫蔵)

【富國論】全3巻, 雄松堂出版(復刻版), 1993年

Adam Smith (1776), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Volume I and Volume II. [ファクシミリ版『国富論』, 雄松堂書店, 1976年]

Campbell, R.H., Skinner, A.S. and W.B. Todd (eds) (1976), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Volume I and Volume II, Clarendon press. [グラスゴー版『国富論』]

Cannan, E. (1920), *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Volume I (Second edition, 1920), (Fourth edition, 1925) and Volume II (Third edition, 1922), Methuen & Co. Ltd. [キャンナン版『国富論』]

Goldsmith' -Kress library of Economic Literature [マイクロフィルム版]

Goldsmith' -Kress library of Economic Literature [オンライン版: *The Making of the Modern World* (NII-REO 人文社会科学系コレクション)]

【参考文献】

Carpenter, K.F. (1976) 「ヨーロッパ大陸におけるスミスと『国富論』」(『書誌的にみたスミス『国富論』の形成とその国際的伝播』(ファクシミリ版『国富論』の「解説(別冊)」)に所収)

遠藤和朗(1985)「アダム・スミス『国富論』初版 -本学が所蔵する貴重本12-」『東北学院時報』第419号, 1985年6月15日.

遠藤和朗(2001)「アダム・スミス・コレクション購入 『国富論』初版原裝アンカット本など」『東北学院時報』第597号, 2001年9月15日.

Hagemann, H. (2017), "German editions of Adam Smith's *Wealth of Nations*," *Economic Analyses in Historical Perspective*.

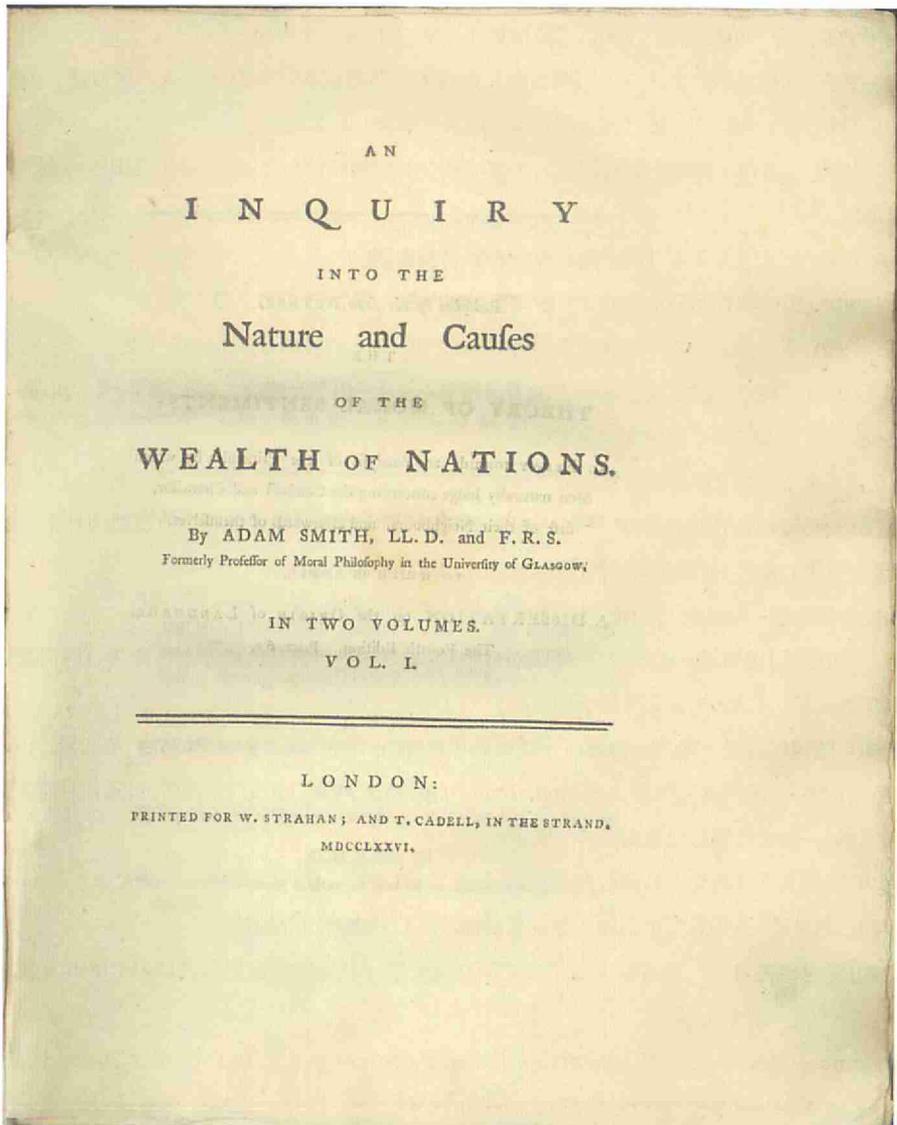
林直樹(2010)「ジョージ・ホーン『アダム・スミス博士への手紙』」『経済論叢別冊 調査と研究(京都大学)』第36巻, pp.35-53.

井上植恵(2003)「アダム・スミス『道徳感情論』再考 -第六版第六部を中心として」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.4, pp.415-426.

金子宏二(1979)「『藩学養賢堂蔵洋書目録』について -慶応三年福沢諭吉将来本-」『早稲田大学図書館紀要』第20号, pp.98-113.

金子光男(2005)「アダム・スミス『国富論』初版本(1776年刊)の購入に寄せて -この初版にひそむ-

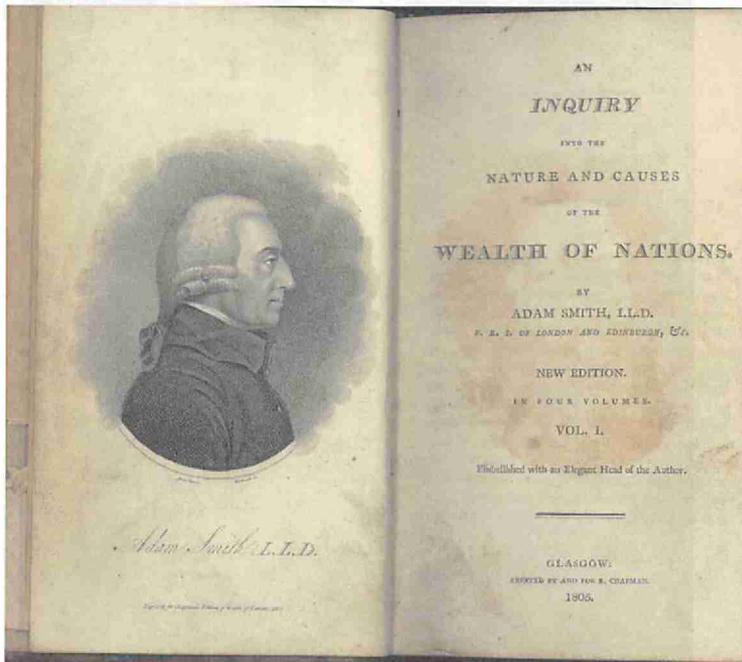
- つの秘話とわが国における草創期の彼の受容過程について・断篇-」『図書の譜：明治大学図書館紀要』第9号，pp.15-22.
- Kelly, A.M. (1964), *The Kress library of business and economics, catalogue* (Reprinted for Baker Library, Harvard University (Reprints of economic classics)).
- 大久保利謙・桑原伸介・川崎勝編 (2001)『津田真道全集 上』みすず書房
- 大河内暁男 (1976)「極東へのスミスと『国富論』の導入」(『書誌的にみたスミス『国富論』の形成とその国際的伝播』(ファクシミリ版『国富論』の「解説(別冊)」)に所収)
- 大河内暁男 (1993)「石川・嵯峨訳『富国論』の完成まで」(『富国論』第3巻，雄松堂出版(復刻版)の「解説」に所収)
- 丸山徹 (2011)『アダム・スミス『国富論』を読む』岩波書店
- 松野尾裕 (1996)『田口卯吉と経済学協会』日本経済評論社
- 三邊清一郎 (1940)「アダム・スミス書誌」『三田学会雑誌』第34巻第9号，pp.117-152.
- 三邊清一郎 (1943)「翻譯『國富論』-國富論書誌續篇-」『三田学会雑誌』第37巻第9号，pp.69-99.
- 水田洋 (1968)『アダム・スミス研究』未来社
- 守矢洋 (1973)「A.スミス『国富論』初版の二つの異本について」『経済学雑誌』第69巻第5号，pp.49-59.
- 向井晃 (1988)「船載洋書目録の考察 -シーボルト再渡来時の将来蔵書目録-」(『鎖国日本と国際交流 下』，箭内健次(編)，吉川弘文館，pp.283-320に所収)
- 沼津市明治史料館(編)(2009)『図説 沼津兵学校』沼津市明治史料館
- Todd, W.B. (1976)「『国富論』の形成 -初版から第5版まで-」(『書誌的にみたスミス『国富論』の形成とその国際的伝播』(ファクシミリ版『国富論』の「解説(別冊)」)に所収)
- 尺次郎 (1990)「資料：『尺 振八』拾遺 -尺振八生誕150年記念-」『英学史研究』第22号，pp.169-178.
- 尺振八(訳)(1886)『明治英和字典 *An English and Japanese Dictionary*』六合館(『近代日本英学資料5 明治英和字典』，ゆまに書房(復刻版)，1995年)
- 杉原四郎 (1977)「スミス研究の動向」『経済資料研究』第12号，pp.3-12.
- 杉原四郎・岡田和喜編 (1995)『田口卯吉と東京経済雑誌』日本経済評論社
- 高橋秀悦 (2018)『海舟日記に見る幕末維新のアメリカ留学 日銀総裁富田鐵之助のアメリカ体験』日本評論社
- Wayland, Francis (1837), *The Elements of Political Economy*, Leavitt, Lord & Company (Political Economy in Nineteenth-Century America, Volume 2として，Thoemmes Press より2003年復刻)



『国富論』初版（1776年）：原装アンカット版
（東北学院大学図書館蔵，横23.5cm×縦30cm）



アダム・スミスの肖像メダリオン（1789年 J.タッシー制作）
（東北学院大学図書館蔵，撮影：栗林野一）



『国富論』グラスゴー版（1805年）
（東北学院大学図書館蔵，見開き 横19.5cm×縦17.5cm）



『經濟說略』1869年

(東北学院大学図書館蔵, 見開き 横23.5cm×縦19cm)

「アダム・スミス・コレクションの性質と書誌に関する一考察」の正誤表

1 ページの注の 4 行目

(誤) OAG ドイツ東洋文化研究会 → (正) OAG ドイツ東洋文化研究協会

10 ページの下から 3 行目

(誤) 第 2 版 → (正) 第 2 巻

24 ページの下から 2 行目

(誤) *Ntionalreichthums* → (正) *Nationalreichthums*